

令和４年度
コンテンツ海外展開促進事業
(我が国映画産業の海外展開のための国際共同製作促進事業)
事業報告書

2023年3月

公益財団法人ユニジャパン

目次

はじめに	3
1.1 日中協定における取扱機関としての事務業務	4
1.1.1 日中認定応募要項・申請書一式	6
1.1.2 日中認定申請予定者向け説明会報告	6
1.1.3 日中協定に基づく認定と審査結果	11
1.2 国際共同製作映画の認定廃止に伴う経過措置にかかる業務	11
2.1 国際共同製作ポータルサイト	12
2.1.1 国際共同製作相談窓口概要	12
2.1.2 国際共同製作ポータルサイト掲載内容	13
2.1.3 国際共同製作ポータルサイトアクセス分析報告	22
2.1.4 国際共同製作ポータルサイト広報	55
2.2 国際共同製作者カンファレンス	58
2.2.1 国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス開催概要、映画祭との連携	58
2.2.2 国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス議事録	60
2.2.3 国際共同製作ポータルサイトへの掲載	65
おわりに	73

はじめに

本報告書は、「令和4年度コンテンツ海外展開促進事業（我が国映画産業の海外展開のための国際共同製作促進事業）」（以下、「本事業」という）の事業成果をまとめたものである。

我が国の映画は、原作・音楽・アニメなどの要素を含む総合芸術として波及効果が大きいコンテンツであり、当該分野を発展させていくためには日本国内市場に留まらず、海外に積極的に展開していくことが重要である。

映像コンテンツを取り巻く環境は急速に変化している。新型コロナウイルスの感染拡大は世界的な動画配信プラットフォームの成長を加速し流通に大きな変革が生まれた。加えて日本では労働環境の見直しによる持続可能な業界構造への転換が求められている。

映画産業においては、ながらく国内市場が産業の維持に十分な規模であったことから諸外国で海外市場を目指すための大きな役割を果たしている「国際共同製作」についても、他国と比べて製作数は伸び悩んでいる状況だ。しかしながら少子高齢化が進み海外市場への展開が重要となってきたなか、2018年5月9日に「日本国政府と中華人民共和国政府との間の映画共同製作協定」（以下「日中協定」という。）が署名され発効した。2020年度には、更なる国際共同製作の推進、ひいては我が国映画産業の海外展開を推し進めるには何をすべきかを検討すべく、業界関係者や国際共同製作に関する有識者を交えた検討委員会、諸外国の調査を実施し、そこから得られた課題として日本には映画産業を支援する窓口が統一されていないことで映画製作者が支援に関する情報を得るための妨げとなっていること、国際共同製作を推進するためにはまずは製作者レベルの交流を活発に行い、人と人をつなぐ場が必要であるということが提示された。2021年度には改善にむけて、国際共同製作ポータルサイトを開設、運営することとなり、日中間での製作者による意見交換を行った。

2022年度はこれらの課題を踏まえ、世界から製作者が集まり発信の拠点となる東京国際映画祭やTIFFCOMと連携して、製作者間での交流を深めるべく、日中を含む国際的な視野を持つ関係者によるカンファレンスを行うとともに、引き続き国際共同製作ポータルサイトからの情報発信を行った。

1 章 認定業務

「日中映画共同製作認定制度」は 2018 年 5 月 9 日に署名・発行された日本国政府と中華人民共和国政府による「日本国政府と中華人民共和国政府との間の映画共同製作協定」（以下、「日中協定」）に基づく認定制度である。日中協定に基づき日中双方で認定を受けた共同製作映画は、両国それぞれにおいて、自国の法令に従って自国の映画に与えられる全ての特典を完全に享受することが認められる。

2011 年度より実施されていた経済産業省の「国際共同製作認定制度」は、我が国を含む二か国以上で共同製作される劇場用長編映画（実写劇映画及びアニメーション映画）の制作において、国際共同製作作品と認定された作品に対して「最終認定書」の発行を行うものであった。ユニジャパンが窓口として審査、最終認定書を発行し、申請者はこの最終認定書を以って文化庁の「国際共同製作映画への支援」への申請を行った。2019 年度を以って「国際共同製作認定制度」は廃止となり、本年度はそれに伴う経過措置にかかる業務のみを継続して行った。

1.1 日中協定における取扱機関としての事務業務

日中協定の附属書に規定された権限のある当局（外務省、文化庁及び経済産業省）から取扱機関として指定を受け、日中協定に基づく認定の窓口等、日中映画共同製作認定に係る事務業務の一部を委任された。認定業務の概要は、以下のとおりである。

(a) 対象

我が国と中華人民共和国を含む二か国以上で共同製作される劇場用長編映画（実写劇映画、記録映画及びアニメーション映画）

(b) 申請期間

申請は随時受け付ける。日中協定に基づく認定は、申請に必要なすべての書類の提出日から起算して 45 営業日以内に審査結果が通知される。なお、日中協定第五条 1 により、認定（協定上は「暫定的な確認」）は共同製作映画の製作に入る前に申請し、受ける必要がある。

【注釈】ただし、2021 年度に日中双方の承認により、第五条 1 については一部解釈の変更を行い、日中どちらか一方でのみ製作を開始された作品で製作過程において「共同製作映画」として製作されることとなったものについては、製作が開始された後であっても、「共同製作映画」としての製作が開始される前であれば認定（暫定的な確認）を受けることが可能となり得るとし、柔軟な対応を可能にした。

(c) 申請

申請は日本の製作者団体（制作会社を含む）が行い、海外の製作者からの申請は受け付けない。応募要項に従って必要書類を作成し提出する。

(d) 審査

提出書類は、専門家による確認を経て、日中協定に定める権限のある当局が審査基準に照らして審査する。事務業務として申請者からの申請があった際に権限のある当局に連絡し、専門家の推薦を行う。専門家が決定されたのち、専門家と権限のある当局の日程を調整のうえ、「日中協定認定委員会」を開催する。日中協定認定委員会では、法務・制作経理等の各専門家が申請書類を確認し、意見交換を行う。各専門家からの意見を受け、申請者からの必要書類に不備があった場合は再提出を求め、協定の基準にみあった作品を認定する。

(e) 認定

すべての提出書類が受理され、審査基準を満たしていることが確認されれば、これを申請者に通知するとともに確認書を交付する。審査および確認は制作前と完成後の2回実施される。日中協定に基づいて中国国内において自国の映画に与えられる全ての特典を完全に享受するためには、日中双方でそれぞれの申請者が確認を受け、各国内法に基づき上映許可が与えられる必要がある。

図 1 申請から認定までの流れ



1.1.1 日中認定応募要項・申請書一式

日中協定に基づく認定に必要な申請書類と応募要項は以下のとおりである。（本報告書に別添）

1. 日中映画共同製作認定応募要項

2. 日中映画共同製作認定 申請書

3. 予算表

4. 日中映画共同製作認定チェックリスト

1.1.2 日中認定申請予定者向け説明会報告

日中映画共同協定認定の周知および利用促進のため、製作者向けの説明会を行った。昨年に引き続き本年も遠方からも参加可能なオンラインにより実施、また、申請様式が類似である文化庁の「国際共同製作映画への支援」制度の説明会と合同で行うことで、製作者の利便性をはかった。告知募集案内は以下のとおり。

【画像 1:メーリングリストでの告知】

From

UNI JAPAN Newsletter

▼

【12/5(月)開催】日中映画共同製作協定認定/国際共同製作映画支援 オンライン合同説明会

☆ 2022/11/20 日曜日 12:36

UNI JAPAN

※本メールは、公益財団法人ユニジャパンのニュースレターに登録されたか、当財団のセミナー等に参加され、名刺をいただいた皆様にお送りしています。

**日中映画共同製作協定認定/国際共同製作映画支援
オンライン合同説明会のお知らせ**

日中映画共同製作協定に基づく認定を受けた共同製作映画は、両国それぞれにおいて公式共同製作作品として認められます。また文化庁では毎年、国際共同製作映画の製作活動を支援しています。

映画の国際共同製作を推進するこれらの取り組みの応募・募集についての合同説明会をオンラインで行いますので、この機会にご参加のうえご活用ください。

日時 2022年12月5日（月）14：00～15：30

説明会はZoomウェビナーで行います。

参加ご希望の方は、お早めに下記より事前登録をお済ませください。

事前登録URL
https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_mQfCpMwwSdG9JYmMzr6xgA

※ 事前登録により個別URLから当日の視聴が可能となります。当日まで事前登録は可能ですが、視聴URLは登録が完了してからの発行となりますのでご注意ください。質疑応答に際し一部ブラウザでは音声機能に制限がある場合がありますので、アプリのご使用をおすすめいたします。

ご参加時のお問い合わせ

それぞれ下記サイトに公開している募集案内、応募要項に基づいて説明しますので、お手元にご用意ください。

■ 日中映画共同製作協定
<https://www.co-pro.unijapan.org/bojca/>

■ 令和5年度国際共同製作映画への支援に関する募集について
※令和5年度の募集要項は、現在作成中です。以下より、令和4年度の募集要項をご確認ください。
https://www.bunka.go.jp/seisaku/geiutsubunka/eiga/seisaku_shien/

【本件に関する問い合わせ先】
公益財団法人ユニジャパン
TEL: 03-6226-3022
E-mail: copro@unijapan.org
配信停止は[こちら](#)

【画像 2: ユニジャパンホームページ・ニュース欄での告知】



ユニジャパンは、東京国際映画祭を開催するほか、
日本映画・映像コンテンツの海外展開支援を行っています。

Google 提供

[ホーム](#) [ニュース](#) [国際共同製作](#) [海外展開支援](#) [参考情報](#) [リンク集](#) [UNI JAPANについて](#)

[ホーム](#) > [ニュース](#) > [お知らせ](#) > [ユニジャパン](#) > [日中映画共同製作認定 / 国際共同製作映画支援オンライン合同説明会のお知らせ](#)

[シェアする](#) [Tweet](#)

ユニジャパン

日中映画共同製作認定 / 国際共同製作映画支援 オンライン合同説明会のお知らせ

2022年11月20日

日中映画共同製作協定に基づく認定を受けた共同製作映画は、両国それぞれにおいて公式共同製作作品として認められます。

また文化庁では毎年、国際共同製作映画の製作活動を支援しています。

映画の国際共同製作を推進するこれらの取り組みの応募・募集についての合同説明会をオンラインで行いますので、この機会にご参加のうえご活用ください。

■日時■

2022年12月5日（月）14：00～15：30 説明会はZoomウェビナーで行います。
参加ご希望の方は、お早めに下記より事前登録をお済ませください。

●事前登録URL：https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_mQfCpMwwSdG9JYyMzr6xgA

※※ 事前登録により個別URLから当日の視聴が可能となります。

当日まで事前登録は可能ですが、視聴URLは登録が完了してからの発行となりますのでご注意ください。

質疑応答に際し一部ブラウザでは音声機能に制限がある場合がありますので、アプリのご使用をおすすめいたします。

■ご参加時のお願い■

それぞれ下記サイトに公開している募集案内、応募要項に基づいて説明しますので、お手元にご用意ください。

▼日中映画共同製作協定

<https://www.co-pro.unijapan.org/pojca/>

▼令和5年度国際共同製作映画への支援に関する募集について

※令和5年度の募集要項は、現在作成中です。以下より、令和4年度の募集要項をご確認いただけます。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/eiga/seisaku_shien/

■本件に関するお問い合わせ先■

公益財団法人ユニジャパン
TEL: 03-6226-3022
E-mail: copro@unijapan.org

ニュース

お知らせ

- ユニジャパン
- 業界通信

募集情報

- 映画祭
- 企画マーケット
- ファンド・その他

映画祭参加・受賞作品

- 参加作品
- 受賞作品

[画像 3: 国際共同製作ポータルサイト・ニュース欄での告知]

The screenshot shows the top navigation bar of the Japan Film Co-Production Portal. The header includes the site logo, navigation links like '参加サイト', 'Japan Film Co-Production Portal - 国際共同製作...', 'カスタマイズ', '0', '+ 新規', and '投稿を編集'. Below the header, there are buttons for 'NEWS' and 'コラム', and a sidebar with links for '国際共同製作協定', '海外情報', '映画関連支援・データベース', and '相談'. The main content area displays a news announcement titled '日中映画共同製作協定認定/国際共同製作映画支援 オンライン合同説明会のお知らせ' dated 'Nov 22, 2022'. The text explains the recognition of co-production agreements and the upcoming online contract explanation meeting. It provides a registration URL, a Zoom link, and contact information for the Japan Film Co-Production Portal.

トップページ > News一覧

日中映画共同製作協定認定/国際共同製作映画支援 オンライン合同説明会のお知らせ

Nov 22, 2022

日中映画共同製作協定に基づく認定を受けた共同製作映画は、両国それぞれにおいて公式共同製作作品として認められます。また文化庁では毎年、国際共同製作映画の製作活動を支援しています。

映画の国際共同製作を推進するこれらの取り組みの応募・募集についての合同説明会をオンラインで行いますので、この機会にご参加のうえご活用ください。

日時 2022年12月5日（月） 14：00～15：30

説明会はZoomウェビナーで行います。
参加ご希望の方は、お早めに下記より事前登録をお済ませください。

【事前登録URL】
https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_mQfCpMwwSdG9JYyMzr6xgA

※ 事前登録により個別URLから当日の視聴が可能となります。当日まで事前登録は可能ですが、視聴URLは登録が完了してからの発行となりますのでご注意ください。質疑応答に際し一部ブラウザでは音声機能に制限がある場合がありますので、アプリのご使用をおすすめいたします。

【ご参加時のお願い】
それぞれ下記サイトに公開している募集案内、応募要項に基づいて説明しますので、お手元にご用意ください。

■ 日中映画共同製作協定
<https://www.co-pro.unijapan.org/pojca/>

■ 令和5年度国際共同製作映画への支援に関する募集について
※ 令和5年度の募集要項は、現在作成中です。以下より、令和4年度の募集要項をご確認いただけます。
https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/eiga/seisaku_shien/

【本件に関する問い合わせ先】
公益財団法人ユニジャパン
TEL: 03-6226-3022
E-mail: copro@unijapan.org
配信停止はこちら

(a) 実施概要

「日中映画共同製作認定／国際共同製作映画支援 合同説明会」

・日時：2022年12月5日(木) 14:00～15:30

・開催方法：オンライン会議システム（Zoom）

事前登録により、個別 URL から当日の視聴が可能とした。

（当日まで事前登録は可能、視聴 URL は登録が完了してからの発行）

■議事次第

14:00-14:05 (5分)	開会 — 挨拶（経済産業省、文化庁） — 進行説明（ユニジャパン）
14:05-14:35 (30分)	「国際共同製作映画への支援」応募方法（文化庁）
14:35-15:00 (25分)	「日中映画共同製作認定」制度概要と応募方法（ユニジャパン）
15:00-15:30 (30分)	質疑応答（文化庁・ユニジャパン）
15:30	終了

【画像 4: オンライン説明会の様子】



[画像 5: 事前登録画面]

ウェビナー登録

トピック 日本映画共同製作協会設立賛同者向け制作関係者募集 オンライン公開期間開始

説明

日本映画共同製作協会の設立に賛同を受けた共同制作の映画は、両国それぞれにおいて正式な制作作品として扱われます。また文化庁では海外・国際共同制作映画の制作活動を支援しています。

映画の国際共同制作を推進するこれらの取り組みの一環として、両国については各政府間合意をオンラインで行いますので、この機会にご参加くださることをお願いいたします。

- 登録映画により提供しからず両国の共同許可可能となります。後述で本申請書提出が可能ですが、映画には権利が帰属してからの取引となりますのでご注意ください。
- 権利の侵害に際し→著作権法では音声機能に制限がある場合もありますが、アプリのご活用をおすすめいたします。

●ご質問等はこちらへ▶▶▶
それぞれ下記サイトにて公開している募集案内、応募要項に基づいてお申し込みです、お手厚にご対応ください。

- 日本映画共同製作協会
<http://www.co-pro.unijapan.org/jpn/en/>
- 令和4年度映画共同製作映画への参画に関する募集について
※映画以外の募集要項は、随時更新中です。以下より、今年度年度の募集要項をご確認いただけます。
http://www.korinpa.go.jp/seisaku/seisaku-shirushi/qa/seisaku_shirushi/

期日 2022年11月05日 02:00PM 大抵、東京

名 *

姓 *

メールアドレス *

メールアドレスを入力 *

所属 *

過去に「日本映画共同製作協会設立賛同者向け制作関係者募集」日本映画協会に参加されたことございますか？ *

☐ 参加したことがあります。

☐ 参加したことはありません。

共同製作映画協会の今後の案内をお知らせいたします。 *

(b) 実施結果

1. 参加人数： 49 名（関係者除く）

表 A 参加者内訳

(注釈) 所属は参加者の入力情報に基づく事務局の振り分けによる。同一会社からの参加もカウント。

参加者の所属	参加人数
映画関連会社	18 名
アニメ制作会社	1 名
映像制作会社	14 名
映画関連団体、法人	6 名
大学関係者	5 名
広告・マーケティング	2 名
フリーランス、その他	2 名
省庁	1 名
	計 49 名

2. 主な質問内容

質疑応答で寄せられた主な質問

- 質問は Zoom の Q&A 機能による入力で受付、回答は口頭で行った。
 - ・国際共同製作の支援対象経費の範囲：2023 年 4 月 1 日以前の費用も認められるか
 - ・国際共同製作の支援要件：契約書はドラフトでも受理されるか。
 - ・日中共同製作の中国側の審査：電影局の審査はどの時点で入るか
 - ・日中共同製作の申請は同じ団体から年度内に複数申請可能か
 - ・国際共同製作の支援要件：自治体からの補助金、海外の補助金との重複は問題ないか
 - ・国際共同製作のプロデューサークレジット：「CO プロデューサー」、「共同プロデューサー」、「協力プロデューサー」、「アソシエイトプロデューサー」、「エグゼクティブプロデューサー」でもいいか
 - ・対象経費：海外の共同製作事業者が支出した領収書も必要か

1.1.3 日中協定に基づく認定と審査結果

認定申請件数

2022 年度においては、日中協定に基づく新たな認定申請はなかった。

中国では 2020 年よりコロナ政策による海外との往来が厳しく制限される状態が 2023 年 1 月まで長らく続いたことから、国際的な製作はストップしており、ほとんどの共同製作は香港と行われる状況である。

1.2 国際共同製作映画の認定廃止に伴う経過措置にかかる業務

本認定制度は、国際共同製作向け優遇措置が創設された際に活用されることを目指し、2011 年度より実施、文化庁の「国際共同製作映画への支援」において、本認定を受けていることを要件としていたが 2019 年度を以って廃止となった。制度上は 2020 年度中に文化庁に対し「内容変更承認申請」を行い、受理された作品で 2 年繰越を行った作品の最終認定が対象となるが、当該作品はなかったため、これをもってユニジャパン 認定は終了となった。

2 章 更なる国際共同製作促進のための事務局業務

更なる国際共同製作を推進することを目的に、次なる協定締結を視野に入れ、2021 年度に開設した「国際共同製作ポータルサイト」の運営を継続し、諸外国・地域の国際共同製作作品に対する優遇措置やマーケットに関する情報提供および国内における国際共同製作作品に対して活用され得る各種施策・制度等を紹介した。

また、日中協定の活用促進・映画製作者の交流を目的に、東京国際映画祭と連携し映画祭期間中に来日した海外製作者を招いて「日中製作者カンファレンス」を実施した。

2.1 国際共同製作ポータルサイト

2.1.1 国際共同製作相談窓口概要

2020 年度のコンテンツ海外展開促進事業（我が国映画産業の海外展開のための国際共同製作促進事業）で実施された有識者等による検討委員会の結果、国際共同製作を促進していくために必要な方策として「国際共同製作相談窓口設立」が課題として挙げられ、2021 年度事業として国際共同製作ポータルサイト（日英対応）を開設するに至った。

■背景・目的：

国際共同製作の促進に資する施策・制度等は、国内外で多数存在している。また、それらは目的も様々であり、支援を受けようとする者にとって非常に煩雑である。そこで、支援を受けようとする者の目的に合った施策や制度の紹介や関係機関等への照会・繋ぎなどを行う国際共同製作相談窓口を設置する。また、海外からの国際共同製作に関する問い合わせにも対応できる体制を整え、日本との国際共同製作の促進につなげる。

■概要：

関係政府機関や団体等と連携し、国際共同製作に関する施策や制度情報を掲載したポータルサイトを作成、リンク付けや問い合わせ先の掲載により、各支援へのアクセスを容易にするほか、各種申請手続きのサポートを行う。また、国際共同製作に関する個別の相談も随時受けられる体制にするとともに、各国の支援内容の紹介などを行うことで、共同製作の一助とする。

■内容：

・国際共同製作ポータルサイト（日英対応）

国際共同製作の促進に資する施策・制度等は国内外で多数存在するものの、それらの目的は様々であり、取扱機関も異なることから、支援を受けようとする者にとって非常に煩雑である。そこで、国際共同製作において活用できる施策・制度をポータルサイトにとりまとめ、情報を集約することで各施策・制度の活用を促す。

・関係機関への取り次ぎ及び各種申請手続きのサポート：

サイトに掲載する施策・制度は取扱機関のサイトへのリンク付け、問い合わせ先を明記し、支援を受けようとする者がアクセスしやすい体制を整える。また、必要に応じて各種申請手続きのサポートも行う。

・国際共同製作に関する個別の相談・問い合わせ対応（日英対応）：

国際共同製作に関する個別の相談を随時受けられる体制を整え、関係機関へのつなぎや情報提供を行う。

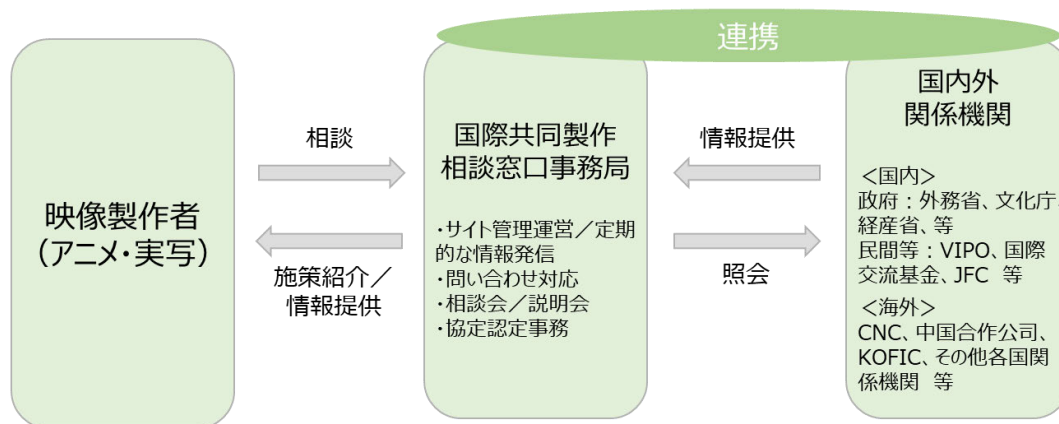
・交流会等の実施：

国際共同製作の情報交換の機会を兼ねた、製作者間のカンファレンス、交流会を実施、国際共同製作案件創出に繋がるような場を提供する。

・日中映画共同製作協定認定業務

①所定の認定基準及び審査基準を盛り込んだ応募要領並びに応募様式の作成、②申請予定者向け説明会の開催、③案件募集、④認定作業、⑤中国の権限のある当局及び取扱機関との調整を行う。

図 2 国際共同製作相談窓口イメージ図



2.1.2 国際共同製作ポータルサイト掲載内容

(a)ポータルサイト概要

■名称：

国際共同製作ポータルサイト（日本語）、Japan Film Co-Production Portal（英語）

■アドレス：

<https://www.co-pro.unijapan.org/>（日本語）

<https://www.co-pro.unijapan.org/en/>（英語）

(b)国際共同製作ポータルサイト デザインリニューアル

■トップページ

サイト掲載の情報の一覧性を高める目的で、トップページのデザインリニューアルを行った。

【画像 6 : トップページデザイン】



Japan Film Co-Production Portalは、映画製作者の方々が活用できる支援やデータベースのポータルサイトです。
映画作品の国際共同製作の促進を目的とし、公益財団法人ユニジャパンが運営しています。

We Support

映画関連支援・データベース



Development

企画に関する支援を受けたい



Matching / Database

パートナーや作品を探したい



Financing

資金調達に関する支援を知りたい



Production

ロケや撮影に関する情報を知りたい



Export Assistance

作品を海外展開する際の支援を知りたい

International Co-Production

国際共同製作協定



Outline of Japan-China Agreement

日中映画共同製作協定の概要



Japan-China Co-production Certificate

日中映画共同製作認定の手続き

Overseas Information

海外情報



Key countries and regions' Market Summary

海外市場の特徴



Key countries and regions' support for Co-productions

共同製作相手国の支援

■新着ニュース

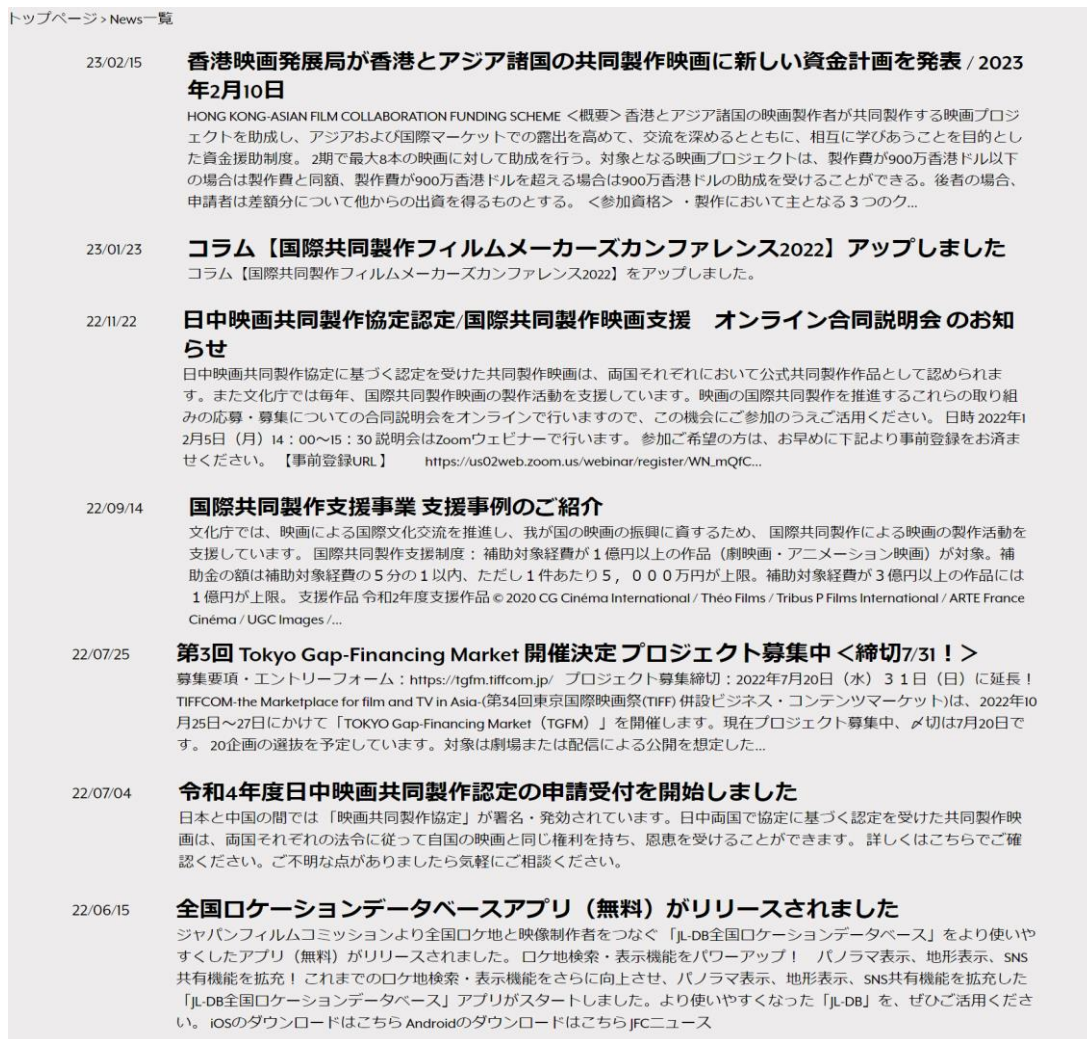
①ニュースはトップページ下部に「新着ニュース」欄を設置し、最新ニュースのタイトルを3つまで表示し、クリックしてニュース本文を閲覧。トップページ上部に設置したボタンからも遷移できる。

【画像7：新着ニュース欄】



②過去のニュースはニュース欄の NEWS LIST から遷移する。

【画像8：ニュース一覧】



■国際共同製作協定

日中国際共同製作協定の概要、申請手順について図解し提示している。

〔画像 9 : 「日中協定の概要」ページ〕

日本と中国の間では「映画共同製作協定」が署名・発効されています。

日中両国で協定に基づく認定を受けた共同製作映画は、両国それぞれの法令に従って自国の映画と同じ権利を持ち、恩恵を受けることができます。

ユニジャパンは、この日中共同製作映画の認定業務の取扱機関に指定されており、作品の認定を受けたい場合はユニジャパンに申請が必要です。

対象	我が国と中華人民共和国を含む二か国以上で共同製作される劇場用長編映画（実写劇映画、記録映画及びアニメーション映画が含まれますが、テレビ用アニメーションは含まれません。）
申請期間	申請は随時受け付けております。日中協定に基づく認定は、書類が提出され、それが受理された日から起算して45営業日以内に審査結果が通知されます。（不備による再提出がある場合は再提出が受理された日から起算）なお、日中協定第五条により、認定（協定上は「暫定的な確認」）は共同製作映画の製作に入る前に申請し、受ける必要があることにご留意ください。
申請者	申請は日本の製作者団体（制作会社を含む）が行ってください。海外の製作者からの申請は受け付けません。
認定	①日中協定に基づく認定を希望する場合は、応募要項に従って必要書類を作成し提出してください。 ②提出書類は、専門家による確認を経て、日中協定に定める権限のある当局が審査基準に照らして審査します。 ③すべての提出書類を提出し、審査基準を満たしていれば、通知するとともに確認書を交付します。 日中協定に基づいて中国国内において自国の映画に与えられる全ての特典を完全に享受するためには、中国の権限ある当局の手続きによって共同製作の中国側パートナーに映画プロジェクト承認書と映画上映許可証が与えられる必要があります。日本側での日中協定に基づく確認書の発行が、自動的に中国側における承認手続きの完了を約束するものではありませんことにご留意ください。

〔画像 10 : 「日中映画共同製作認定の手続き」ページ〕

日中共同製作認定の申請から45営業日以内に評価

日中共同製作認定の申請から45営業日以内に評価

日本：日本の製作者団体 → 申請① → 審査① → 暫定的な確認書発行 → 制作・撮影 → 完成 → 申請② → 審査② → 最終的な確認書発行 → 日中協定認定

中国：中国の製作者団体 → 申請① → 審査① → 暫定的な確認書発行 → 制作・撮影 → 完成 → 申請② → 審査② → 最終的な確認書発行 → 日中協定認定

ポイント1：暫定確認は日中共に撮影開始までに行う必要がある（注9）

ポイント2：中国の製作者団体は映画プロジェクト承認書と映画上映許可証が与えられる必要がある。日中両国の最終的な確認を以って認定となる。

〔注9〕製作当初「共同製作映画」としてではなく日中どちらか一方でのみ製作を開始されたものも、製作過程において「共同製作映画」として製作されることになったものについては、映画全体の製作が開始された後であっても、「共同製作映画」としての製作が開始される前であれば認定（暫定的な確認）を受けることが可能となります。

日中映画共同製作認定の応募方法等については、以下のダウンロード用ファイル内の「応募要項」で必ずご確認ください。

ダウンロード用ファイル：

応募要項、申請書などの必要書類は、下記からダウンロードしてください。

- ◆日中共同製作認定 応募要項
- ◆日中共同製作認定 申請書
- ◆予算表 申請書
- ◆記入用紙

■海外情報

令和2年度コンテンツ海外展開促進事業（我が国映画産業の海外展開のための国際共同製作促進事業）で主要国の映画関連年次統計データを調査して以降、毎年更新することとし、今年度は2021年データへの更新を行った。各国・地域の映画市場、国内市場、共同製作作品数データを掲載。掲載している国・地域は以下のとおりである。

・ヨーロッパ

フランス、イタリア、イギリス、ドイツ

・アジア

中国、韓国、台湾

・北米

カナダ

【画像9「海外市場の特徴」ページに掲載のエグゼクティブサマリー】

フランス

映画産業

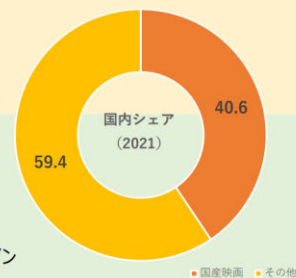
- ・興収規模は欧州1位（全世界第4位）
- ・58か国と協定を結び共同製作を推進
- ・結果、毎年約300本の製作本数の40-45%は海外との共同製作
- ・仏語圏との共同制作が中心

国内市場

- ・国内映画シェア 35-40%（パンデミック時は約40-60%）
- ・興収上位はTOP20のうち8本は自国作品
- ・コメディ作品が強い
- ・国産アニメの需要は低く、主にディズニーを中心としたハリウッド映画がメイン

市場データ (2021年)

・国内興行収入：	6.72億ユーロ（2019年：14.5億ユーロ）
・国内の劇場動員数：	0.96億人（2019年：2.13億人）
・国内のスクリーン数：	6,193（2019年：6114）
・平均チケット価格：	7.0ユーロ（2019年：6.8ユーロ）
・一人あたりの年間平均入場回数：	1.4回（2019年：3.2回）
・マーケットシェアにおける国産映画の割合：	40.6%（2019年：34.8%）
・映画製作本数：	340本（2019年：301本）
*100%国産 = 197本、国際共同製作 = 143本	



「共同製作相手国の支援」のページでは、各国・地域の主な支援団体の概要と支援体系の説明を掲載しているだけでなく、各国・地域について詳しくまとめた資料がダウンロードできるようになっている。資料内では、各国の映画産業に関する支援制度（主な支援団体とその財源、各支援の概要含む）、規制・法制度、国際共同製作協定の運用と国際共同製作作品認定までのプロセス等を掲載している。

[画像 11 : 「共同製作相手国の支援」ページ]



ドイツ

【主な支援団体】

Filmförderungsanstalt
（映画支援機構/通称「FFA」）

ドイツの映画支援は、FFAを中心に行われています。FFAは連邦政府文化・メディア委員会（Bundesregierung für Kultur und Medien、以下「BKM」）の管轄下にある組織です。

公式： <https://www.ffa.de/index.php?id=70>

【支援概要】

FFAを始めとした公的支援を受けるには、ドイツ国籍の承認を受ける必要があります。ドイツ国籍の認定発行は連邦経済輸出管理庁（BAFA）が行い、ドイツの国内法ドイツ映画助成法（FFG）の条件を満たすものであるか確認します。

しかし、国際共同製作協定が適用されないケースの場合でも、外国籍の制作者に対してドイツ製の制作者の出資率が30%以上あることなどを条件にドイツ国籍を承認する場合があります。

企画の段階から、制作、配給、興行、国際展覧に至るまで包括的な支援体制を整えており、作品の商業的成功の度合い（＝動員数）と文化的な成功の度合いをポイント化し支援が決まります。大型作品へ支援を拡充しており、制作費2000万ユーロ以上が対象のものもあります。

概要をダウンロード

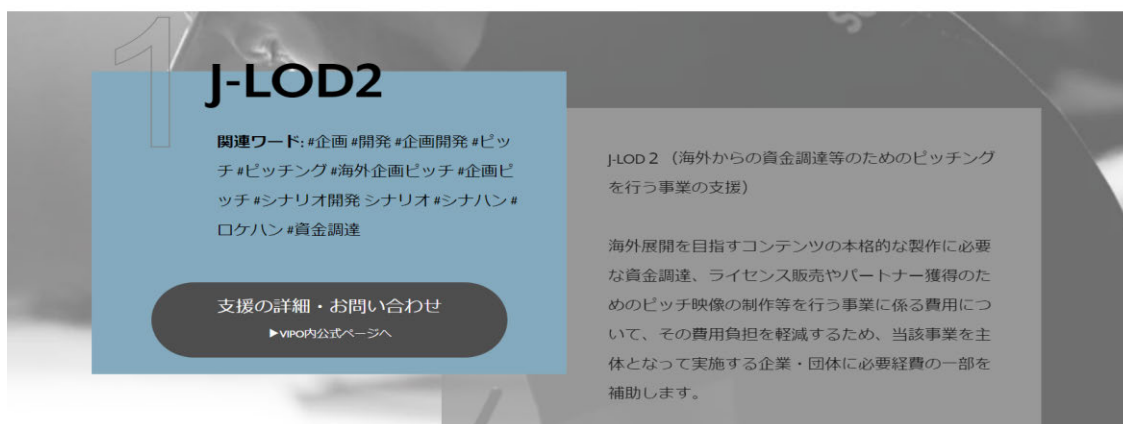
■映画関連支援・データベース

映画製作の段階に合わせて「企画開発」、「マッチング・データベース」、「資金調達」、「制作・撮影」、「海外展開」の5つの下層ページに以下の内容を掲載している。

表 B 「映画関連支援・データベース」掲載一覧

掲載箇所	支援・データベース名	支援窓口
Development 企画開発	J-LOD2	VIPO
	Japan Book Bank	VIPO
	Tokyo Docs	Tokyo Docs
Matching / Database マッチング・データベース	TIFFCOM	ユニジャパン
	日本映画データベース (Japan Film Database/JFDB)	国際交流基金/ユニジャパン
	全国ロケーションデータベース (Japan Location Database/JL-DB)	ジャパン・フィルムコミッション
	Japan Book Bank	VIPO
	Japan Creator Bank	VIPO
	海外バイヤーとのマッチング支援	JETRO
Financing 資金調達	文化芸術振興費補助金 (国際共同製作映画支援事業)	文化庁
	Tokyo Gap-Financing Market	ユニジャパン
	J-LOD2	JETRO
Production 制作・撮影	ジャパン・フィルムコミッション	ジャパン・フィルムコミッション
	全国ロケーションデータベース (Japan Location Database/JL-DB)	ジャパン・フィルムコミッション
	内閣府 大型映像作品ロケーション誘致の 効果検証調査事業	VIPO
Export Assistance 海外展開	J-LOD1	VIPO
	海外映画祭出品支援 (令和4年度日本映画海外発信事業)	ユニジャパン
	海外マーケット出展支援 (令和4年度日本映画海外発信事業)	ユニジャパン
	海外での作品紹介及び上映会	国際交流基金

〔画像 12 : 企画開発ページ〕



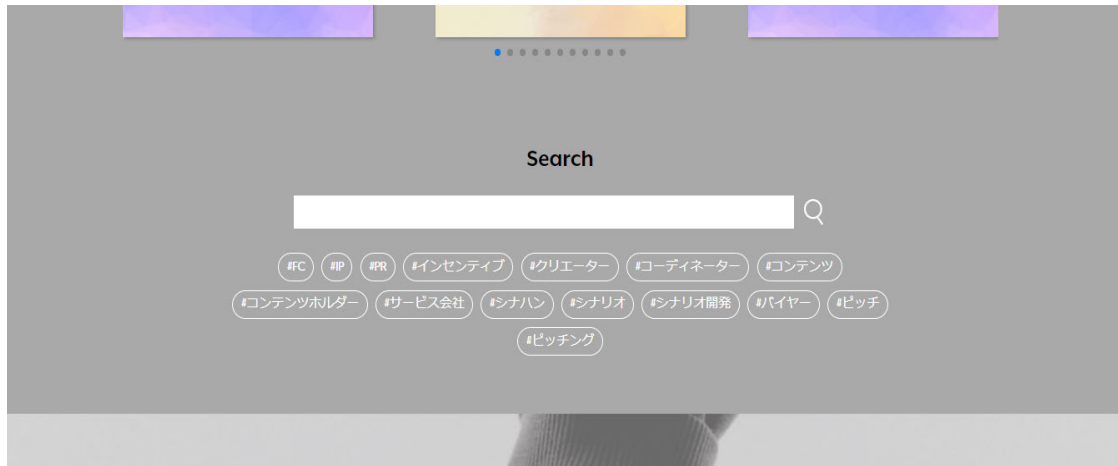
■コラム

「コラム」では、カンファレンスやインタビューを行った際の記事を掲載する。今年度の国際共同製作製作者カンファレンスの概要をまとめ、昨年度行った日中映画製作者カンファレンスと合わせ掲載している（詳細は「2.2 映画製作者カンファレンス」参照）。

■ 検索

検索はトップページに設置、各ページに記載されている単語だけでなく、ニュースに記載したものも検索の対象としている。また、検索は「映画関連支援・データベース」に関するものが多くなることを想定し、各支援・データベースの紹介文にハッシュタグも併せて記載することで、文中では拾いきれない関連ワードも検索可能としている。

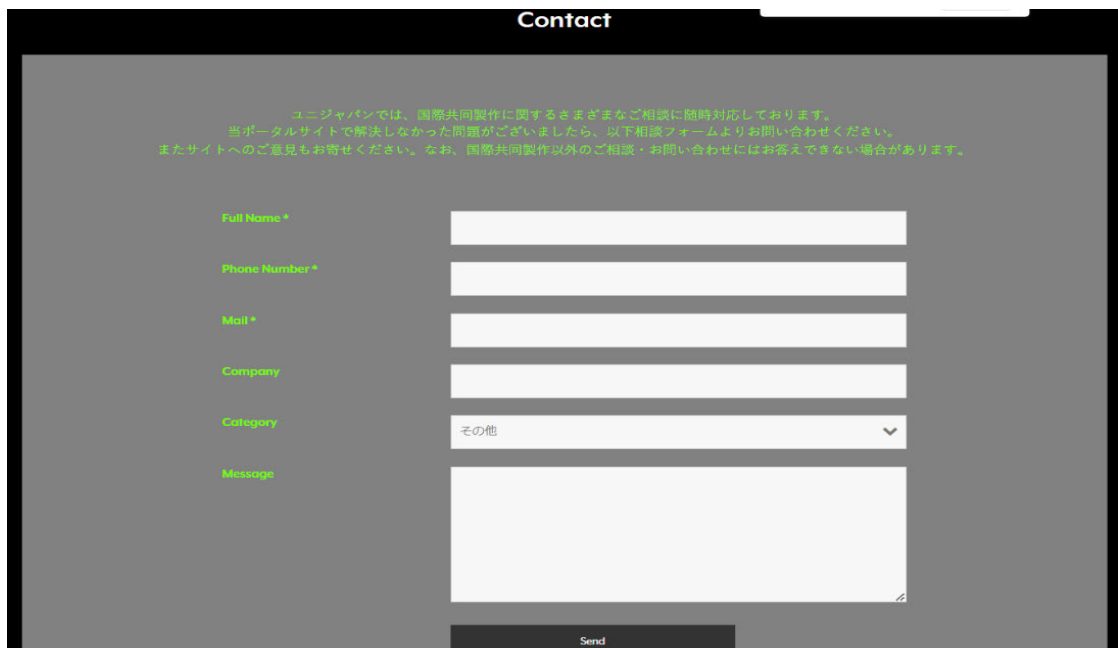
【画像 13：検索フォーム】

The image shows a search interface on a website. At the top, there are three colored rectangular blocks: purple, yellow, and purple. Below them is a row of small dots, with the first one being blue. The word "Search" is centered above a white search input field. To the right of the input field is a magnifying glass icon. Below the input field, there are two rows of rounded rectangular buttons containing various roles and terms in Japanese, each preceded by a hash symbol (#). The first row includes: #FC, #P, #PR, #インセンティブ, #クリエイター, #コーディネーター, #コンテンツ. The second row includes: #コンテンツホルダー, #サービス会社, #シナハン, #シナリオ, #シナリオ開発, #バイヤー, #ピッチ. A third row with a single button #ピッチング is centered below the second row.

■ 相談

トップページに相談フォームを設け、国際共同製作に関する問合せに対応。
寄せられた具体的な相談内容については、「2.3 事務局問合せ内容報告」を参照。

【画像 14：相談フォーム】

The image shows a consultation form titled "Contact" in a dark header. Below the title, there is a block of green text in Japanese explaining the purpose of the form for international co-production inquiries. The form itself consists of several labeled input fields on the left and corresponding text boxes on the right. The labels are: "Full Name *", "Phone Number *", "Email *", "Company", "Category", and "Message". The "Category" field is a dropdown menu with "その他" (Others) selected. The "Message" field is a large text area with a small icon in the bottom right corner. At the bottom of the form is a "Send" button.

2.1.3 国際共同製作ポータルサイトアクセス分析報告

国際共同製作ポータルサイトのアクセス解析は、Google Analytics を用いて実施している。本報告書では 2023 年 2 月 28 日までの結果を取りまとめた。

※用語解説

- ・セッション：ユーザーのサイト訪問数。ユーザーがサイトに訪問した際、訪問後から離脱するまでを「1 セッション」と計測
- ・エンゲージ：「ページビュー」「スクロール」「リンクへのクリック」等の Web サイト上でのアクション
- ・コンバージョン：商品購入や問合せ完了など、目標となるユーザーの行動（未設定）

※流入元用語解説

- ・Direct：ブックマーク、メールソフトのリンク、エクセルなどのファイル、アプリからの流入等が該当
- ・Organic Search：Yahoo や Google などの自然検索からのセッション
- ・Referral：他サイトからのセッション
- ・Organic Social：ソーシャルメディアからのセッション（Facebook、Twitter など）
- ・Unassigned: 割り当てなし

■各月のアクセス分析

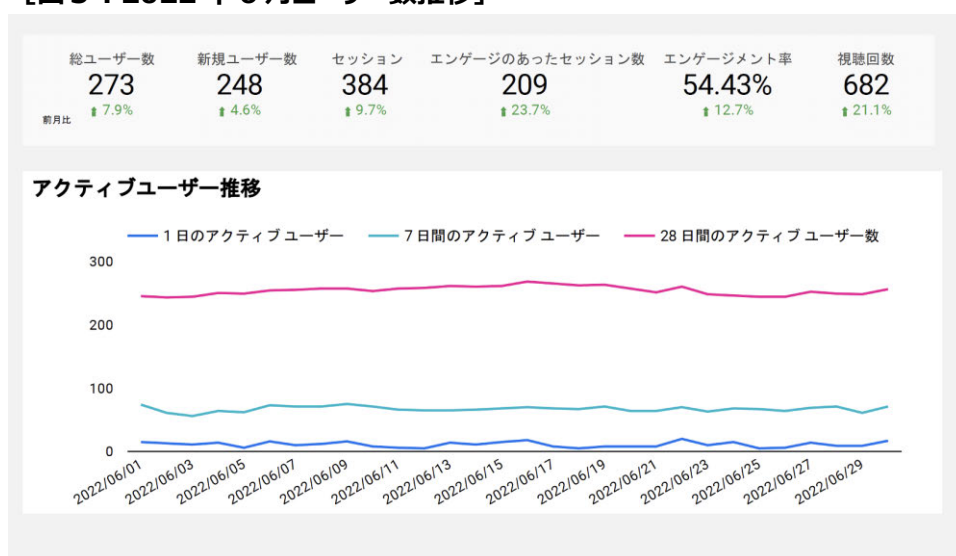
(1) 2022 年 6 月

6 月度は、利用ユーザー数 273、視聴回数 682 回で、約半数の 54.43%のエンゲージメント率を獲得した。(図 3 参照)

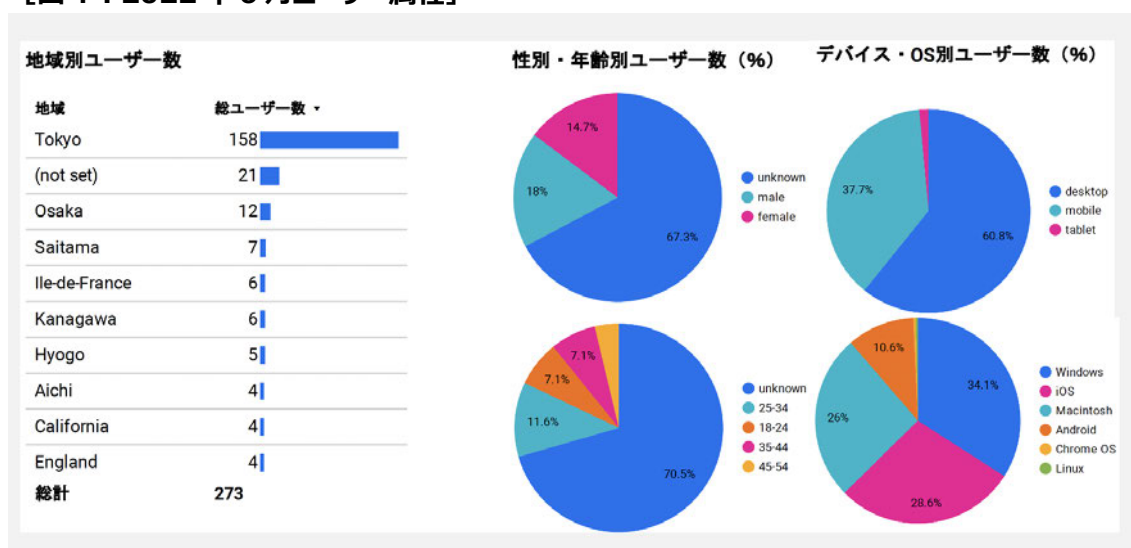
全国ロケーションデータベースアプリのリリースに関するニュース投稿、日中映画共同製作認定ページの資料更新を行っており、視聴回数が 21.1%増加している。

また、日中映画共同製作認定ページの閲覧順位が上がっている。(図 5 参照)

[図 3 : 2022 年 6 月ユーザー数推移]



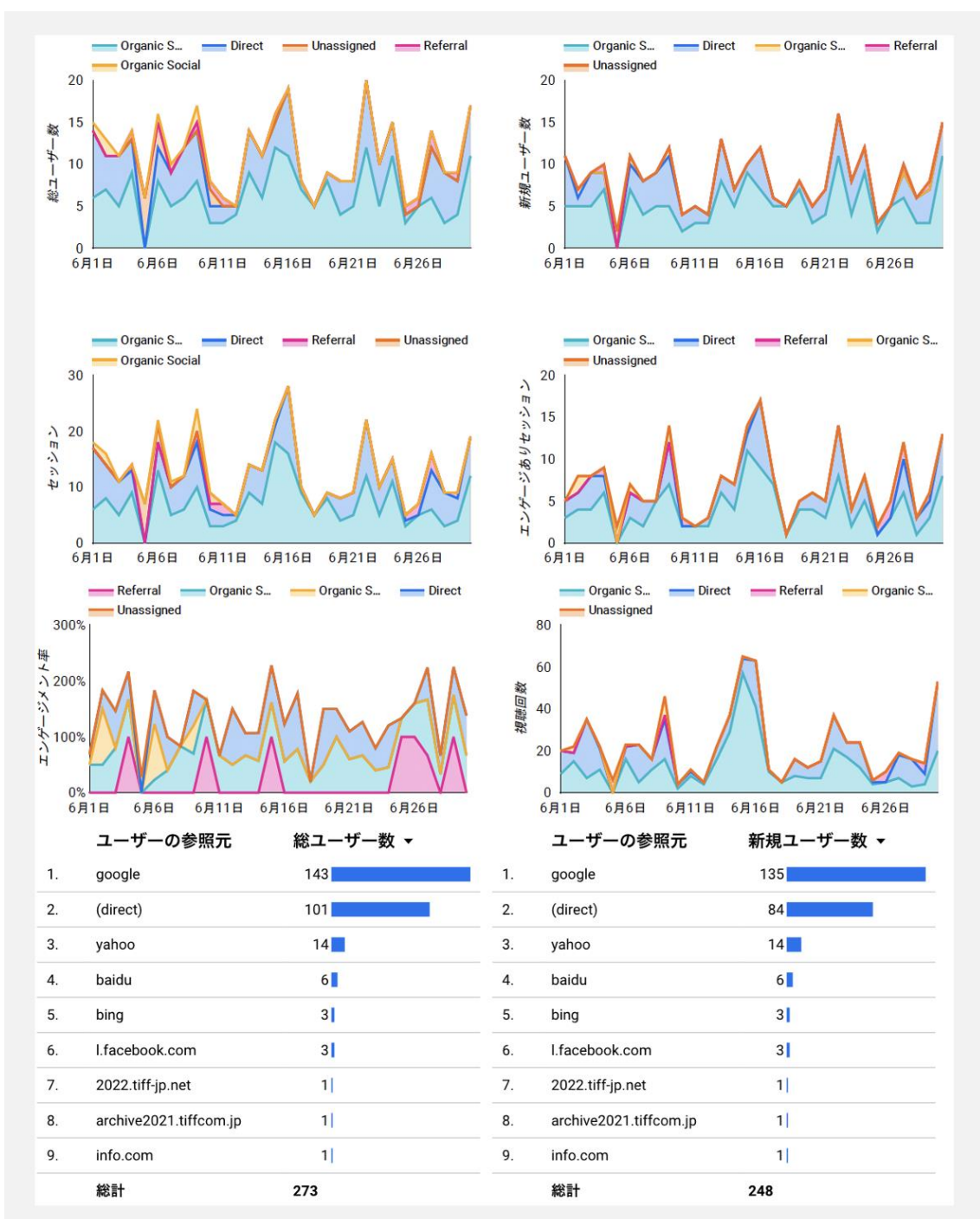
[図 4 : 2022 年 6 月ユーザー属性]



[図 5 : 2022 年 6 月ページ表示回数]



[図6：2022年6月流入元]

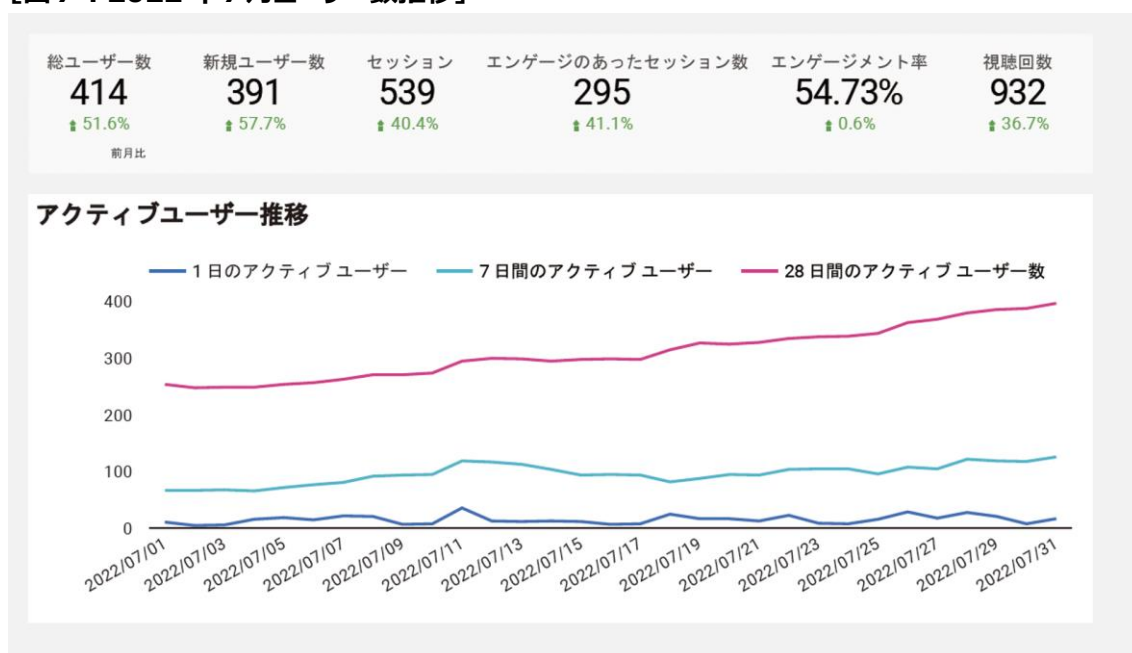


(2) 2022 年 7 月

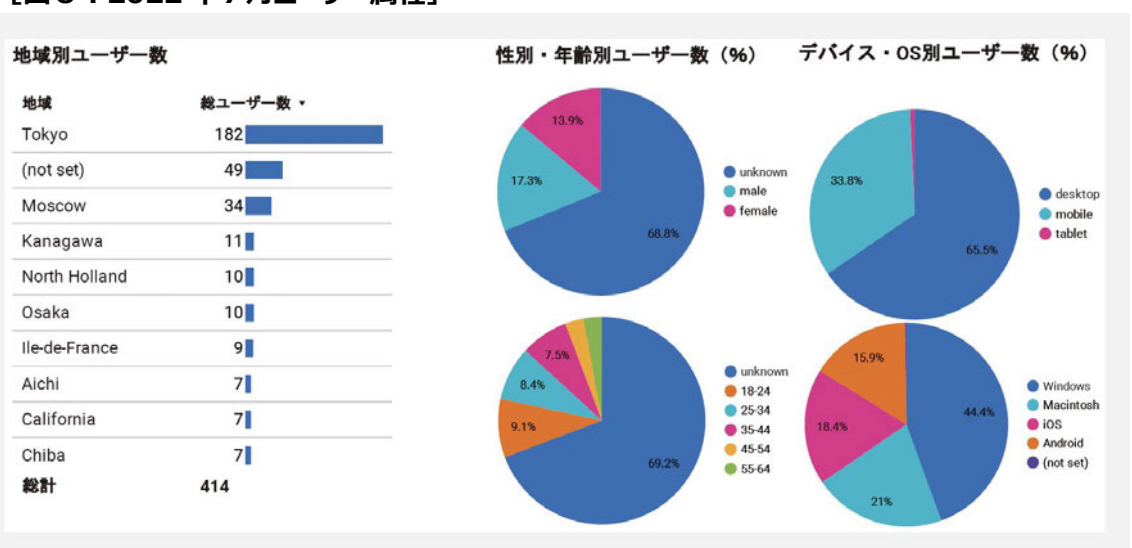
7 月度は、利用ユーザー数 414、視聴回数 932 回で、約半数の 54.73%のエンゲージメント率を獲得し、6 月と連続して、全ての項目においてポイントアップとなっている。中でもユーザー数関連については 50%以上と大幅に増加しており、アクティブユーザー推移も右肩上がりとなっている。(図 7 参照)

7 月度はフランスに加えて、ロシア、オランダ、アメリカ合衆国からのアクセスが増加しており、上位 10 地域の 16%を海外が占めている。(図 8 参照)

[図 7 : 2022 年 7 月ユーザー数推移]



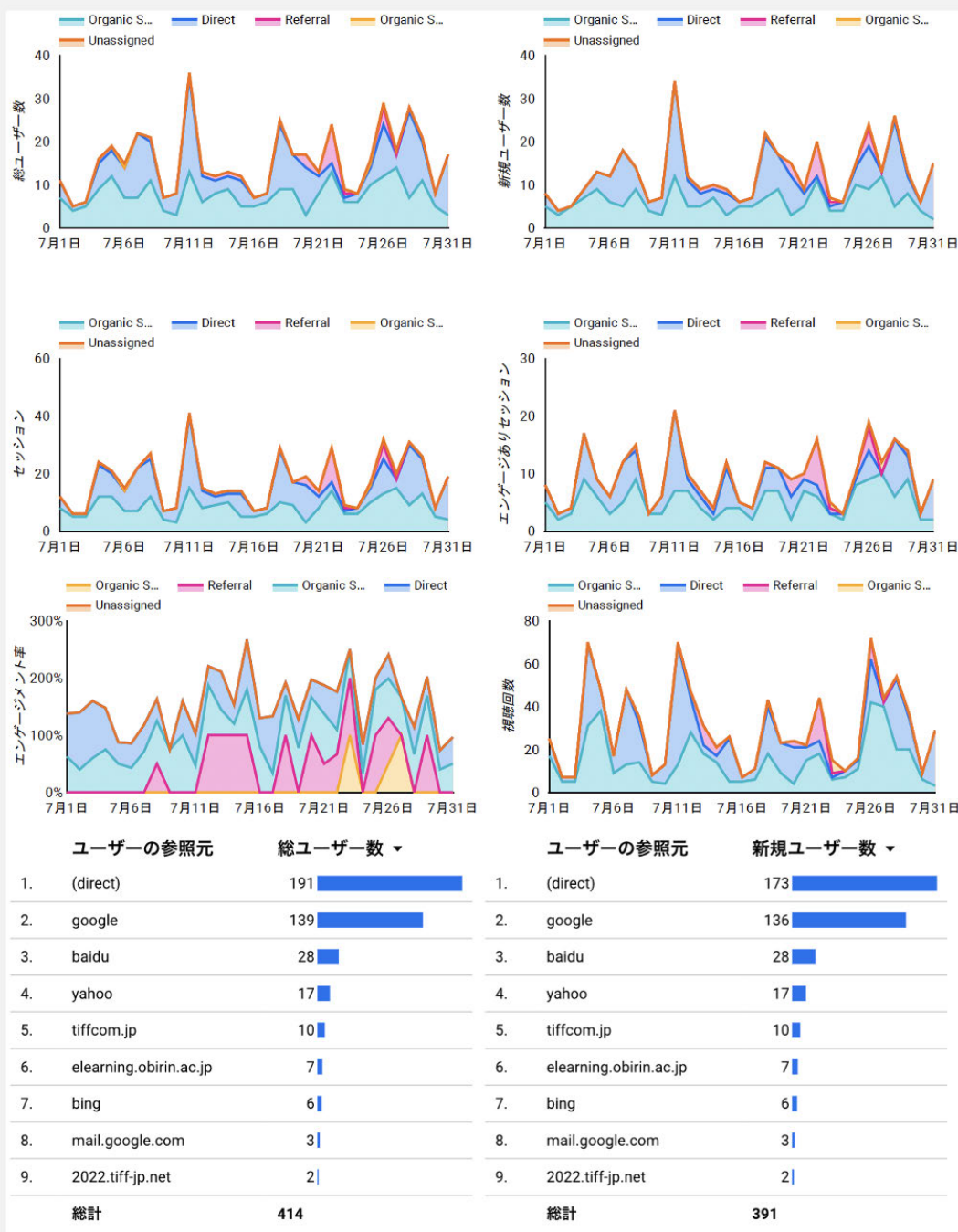
[図 8 : 2022 年 7 月ユーザー属性]



[図9：2022年7月ページ表示回数]



[図 10 : 2022 年 7 月流入元]



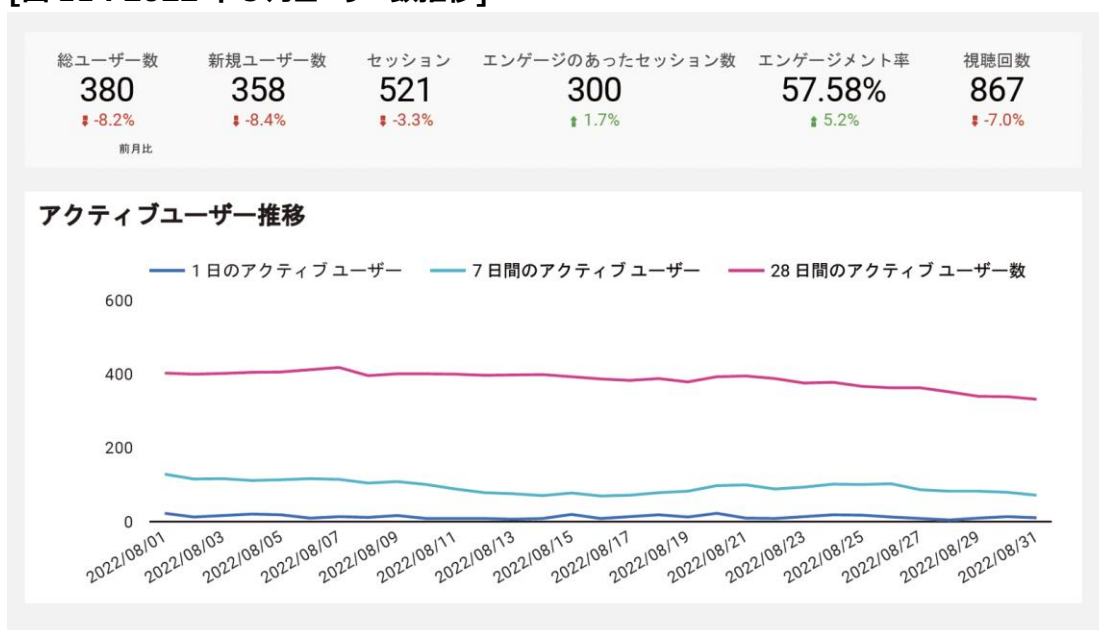
また、グローバルアクセスの増加に伴い、英語ページの閲覧が 2 位までアップし、併せて資金調達の英語ページへのアクセスも増加していることから、海外ユーザーに対しても、支援ページなどの実務的利用を一定数獲得できていることがわかる。加えて、流入元として中国最大検索エンジン「Baidu」の数が大幅に増えていることから、地域別ユーザーには該当しないものの、中国関連のユーザー利用も獲得できていることが推測できる。(図 10 参照)

(3) 2022 年 8 月

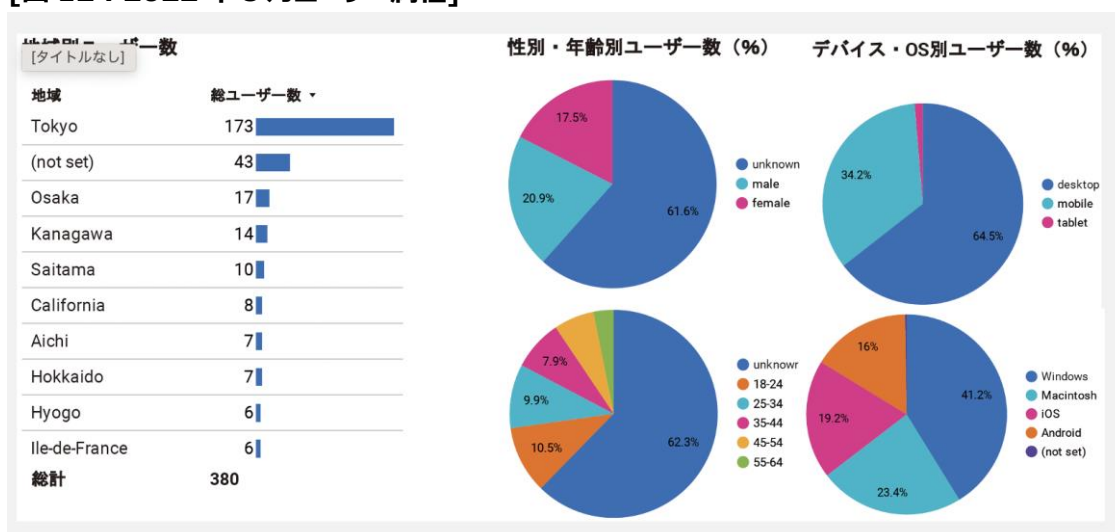
8 月度は、利用ユーザー数 380、視聴回数 867 回で、約半数の 57.58%のエンゲージメント率を獲得している。先月と比べると全体的に減少傾向であるが、毎日アクセス数が横ばいに遷移し、総ユーザー数の平均値としては 1 日 14 人を超えるなど一定のアクセスを獲得していることから、情報を取得したいターゲット層に認知が進んでいると考えられる。(図 11、図 12 参照)

また、「日中映画製作者カンファレンス」の参加者である徐昊辰（じょ・こうしん）氏によって、8/3 に「映画.com」へカンファレンスに関するコラム記事が投稿され、当サイトの紹介リンクを設置していたことから、eiga.com からの流入も見られた。(図 14、画像 13 参照)

[図 11 : 2022 年 8 月ユーザー数推移]



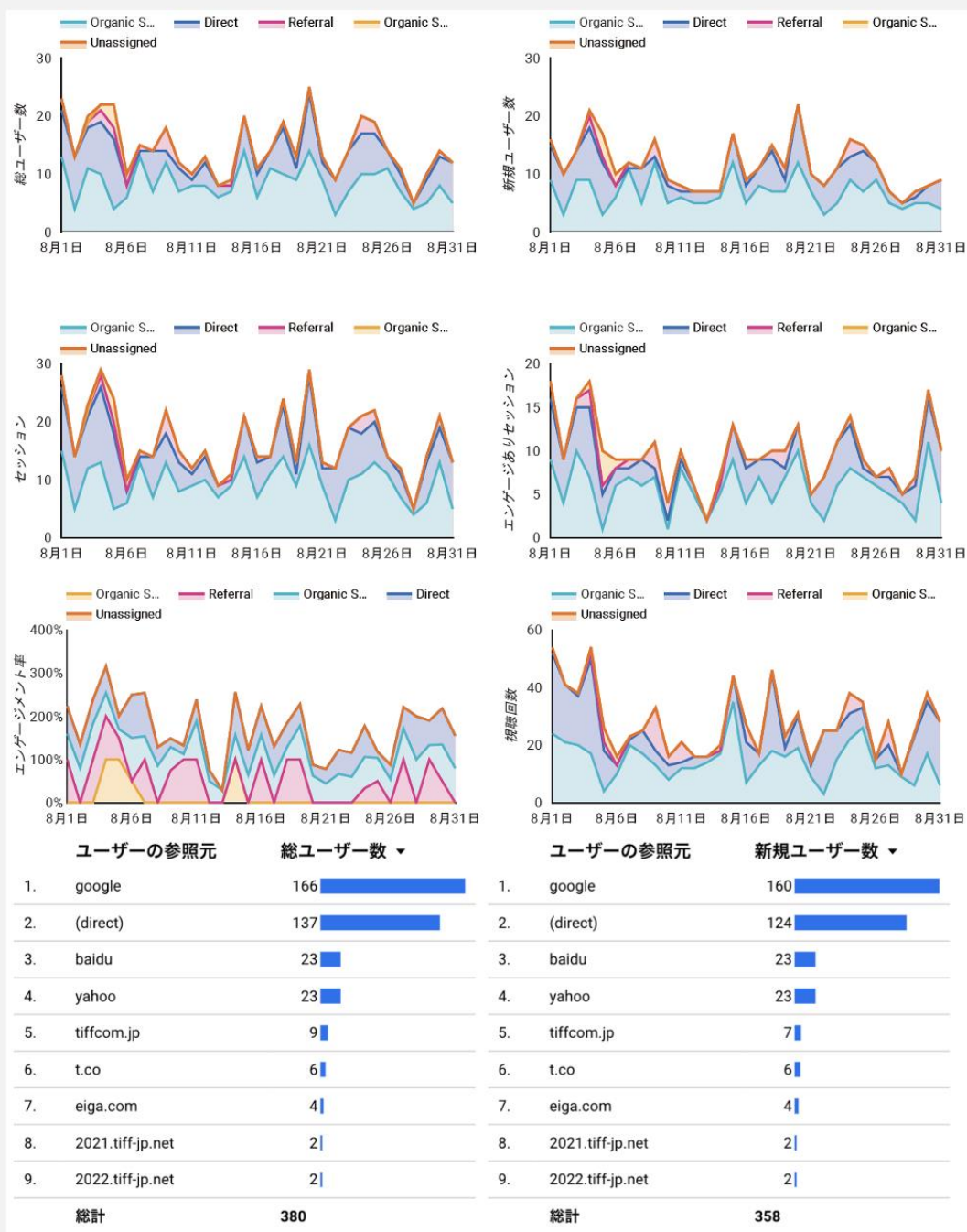
[図 12 : 2022 年 8 月ユーザー属性]



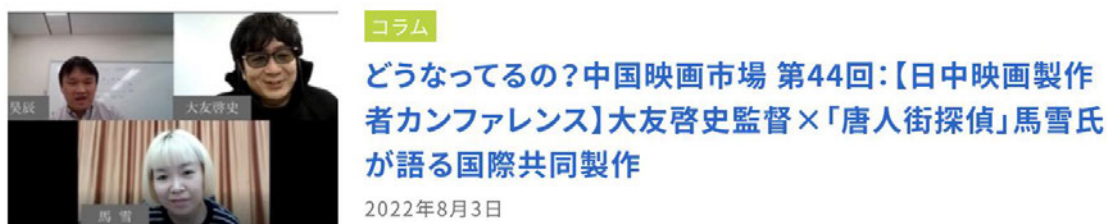
[図 13 : 2022 年 8 月ページ視聴回数]



[図 14 : 2022 年 8 月流入元]



[画像 13： 映画.com へのコラム掲載イメージ]

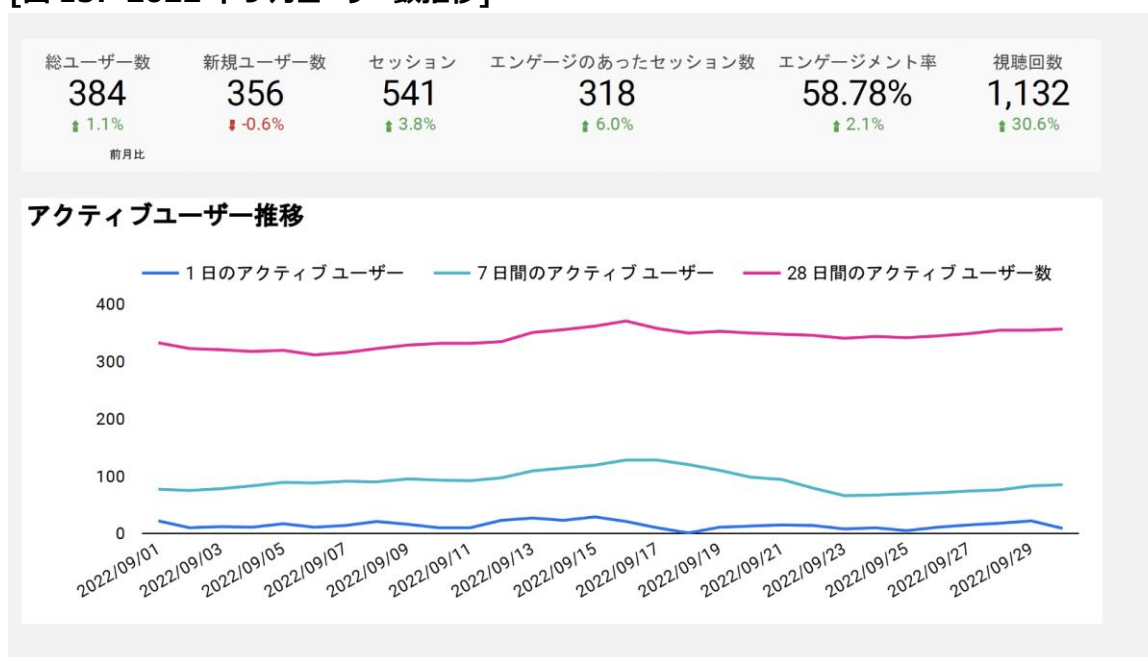


(4) 2022 年 9 月

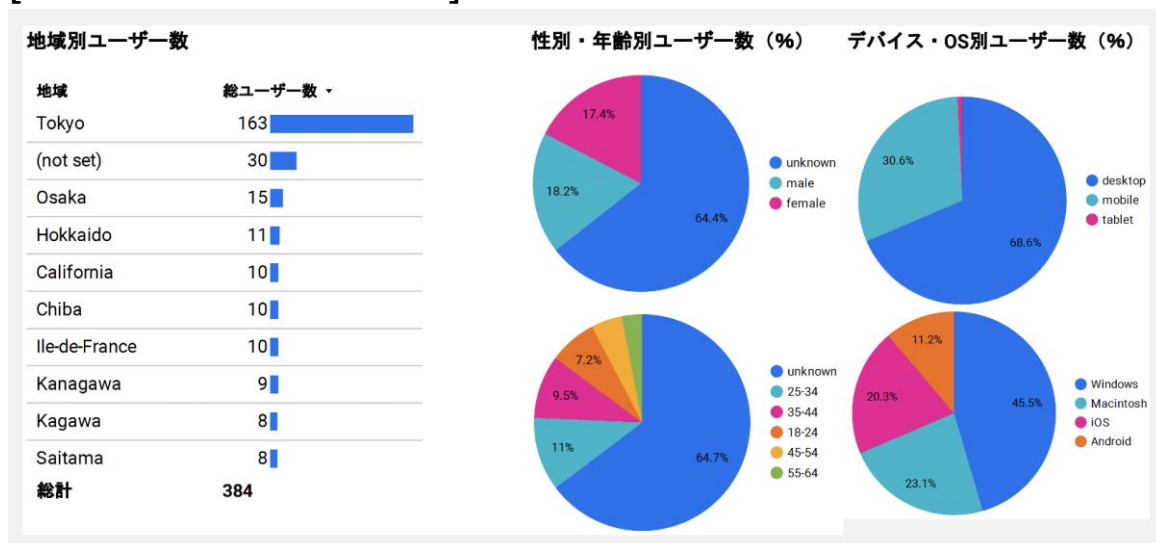
9 月度は、利用ユーザー数 384、視聴回数 1,132 回で、約半数の 58.78%のエンゲージメント率を獲得しており、視聴回数においては前月比 30%の増加となっている。(図 15 参照)

資金調達ページに新規ページ「国際共同製作支援事業 支援事例」を新設し、閲覧上位である資金調達ページの改善を図った。(図 17 参照) また、総ユーザー数は先月よりもさらに増加しており、特に 9/12-16 においては 5 日連続で 20 人を超えるなど、安定したアクセスを獲得している。さらに、9 月度は TIFFCOM 開催が近づき、TIFFCOM 公式サイトや TIFF 公式サイトからの流入が増加した。(図 18 参照)

[図 15: 2022 年 9 月ユーザー数推移]



[図 16 : 2022 年 9 月ユーザー属性]

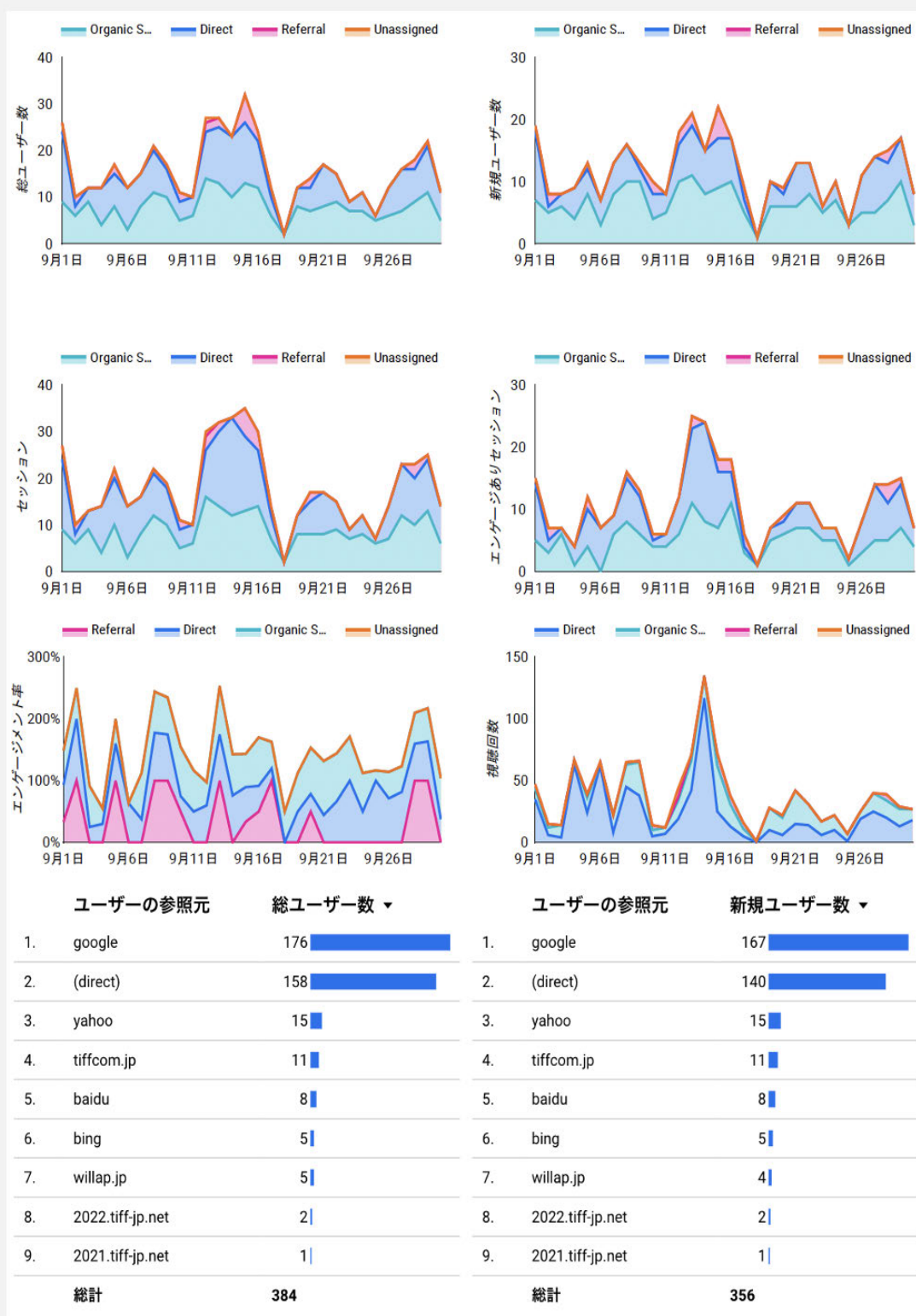


閲覧ページについては、令和4年度の文化芸術振興費補助金のページ、日中共同製作ページ、共同製作相手国の支援ページが安定的に上位となっているほか、資金調達においても日英ともに上位となり、引き続き国内問わずユーザーの情報収集に貢献している。(図 17 参照)

[図 17 : 2022 年 9 月ページ視聴回数]



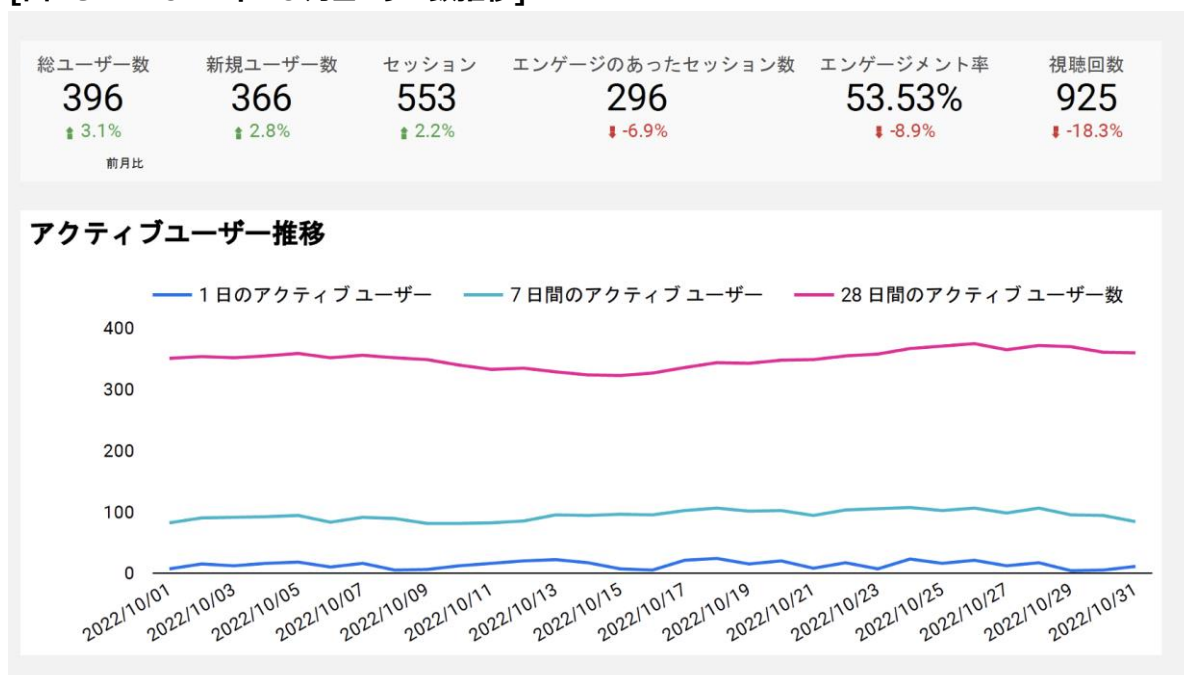
[図 18 : 2022 年 9 月流入元]



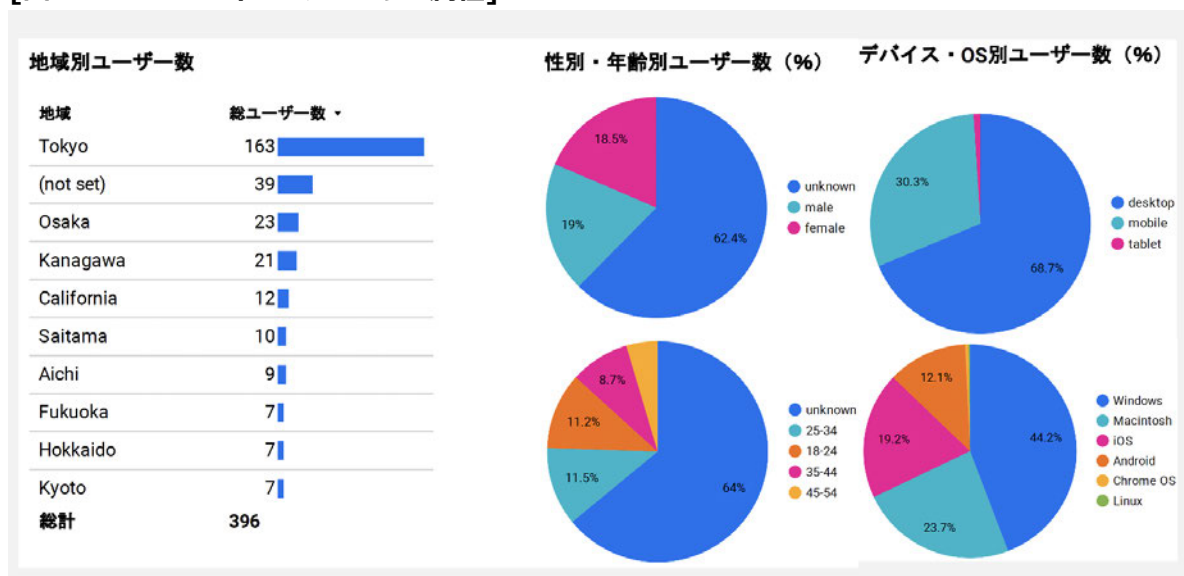
(5) 2022 年 10 月

10 月度は、利用ユーザー数 396、視聴回数 925 回、エンゲージメント率は 53.53%となった。(図 19 参照) 先月より視聴回数などは減少傾向となったが、ユーザー数に関しては、総ユーザー数 380 以上、新規ユーザー数 350 以上を 7 月から 4 ヶ月連続で獲得している。特に 10 月度は 1 日平均数について、総ユーザー数では 15 以上、新規ユーザー数では 10 以上となっており、安定したアクセス数を継続して獲得できている。

[図 19： 2022 年 10 月ユーザー数推移]



[図 20： 2022 年 10 月ユーザー属性]

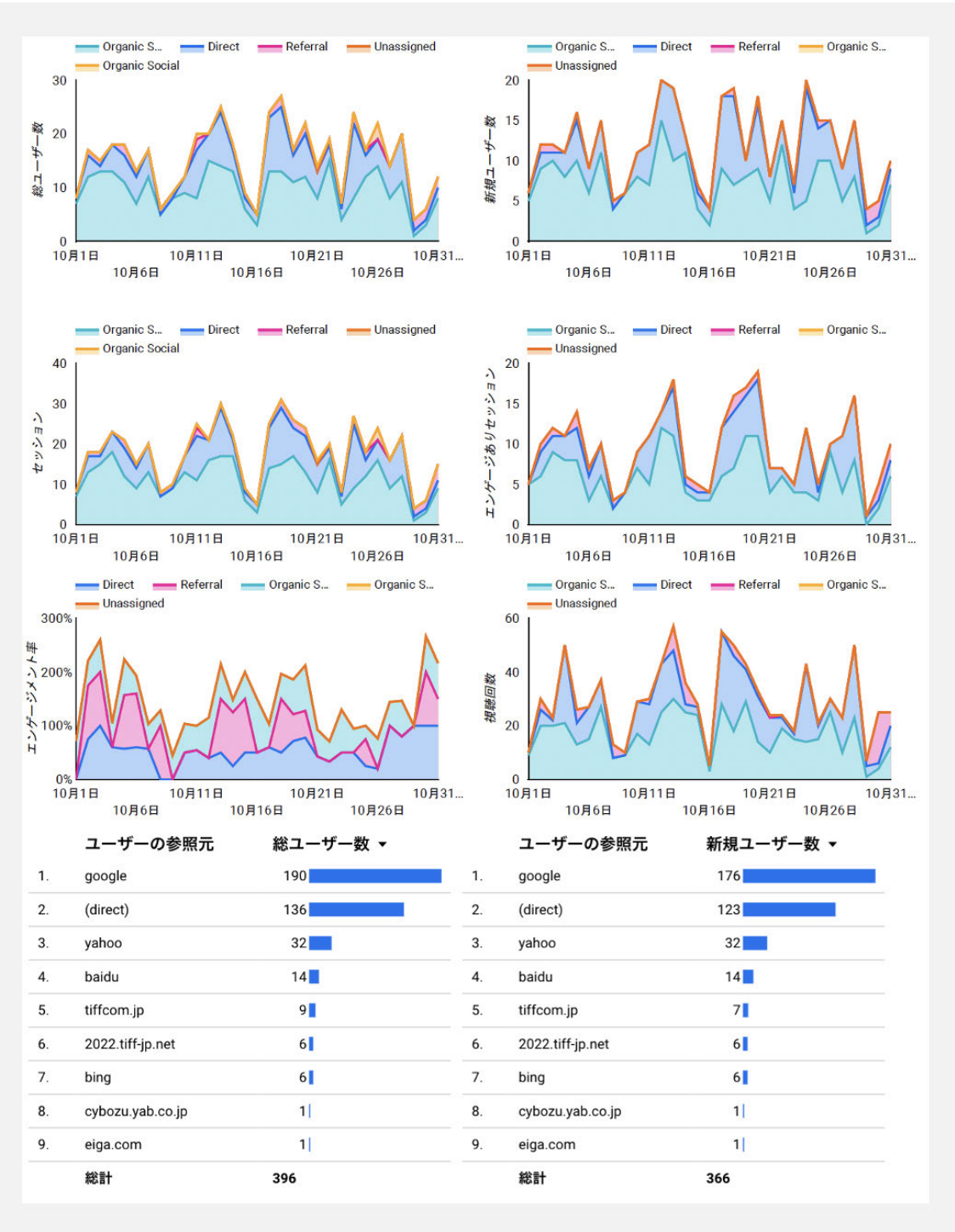


[図 21 : 2022 年 10 月ページ視聴回数]



TIFFCOM 開催に伴い、TIFFCOM 公式サイト、TIFF 公式サイトからの流入も9月度に引き続き獲得している。(図 22 参照)

[図 22 : 2022 年 10 月流入元]

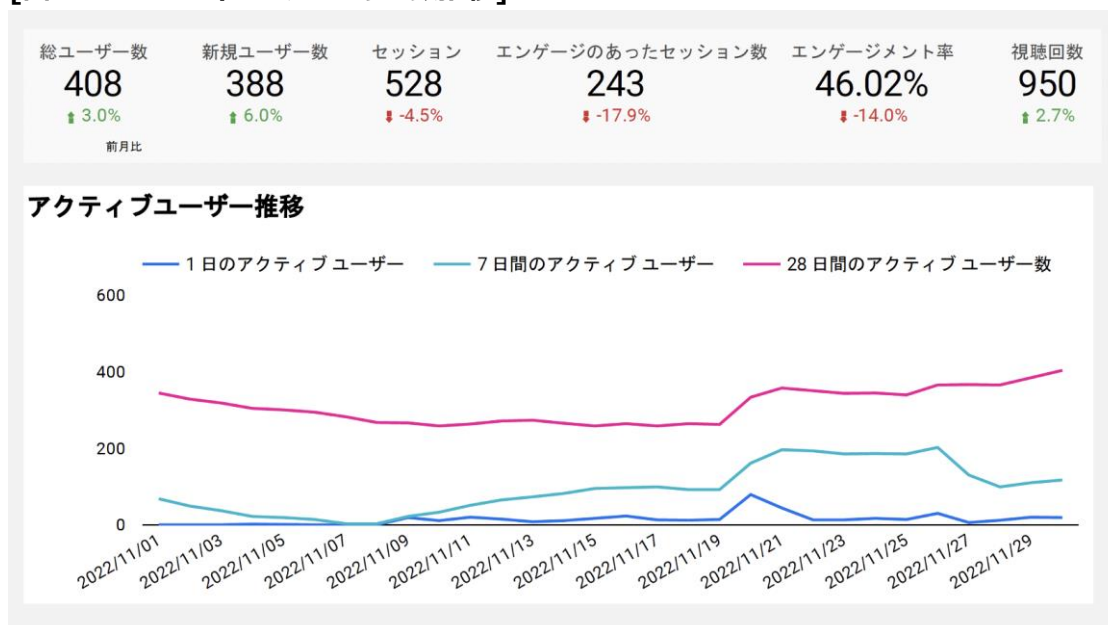


(6) 2022 年 11 月

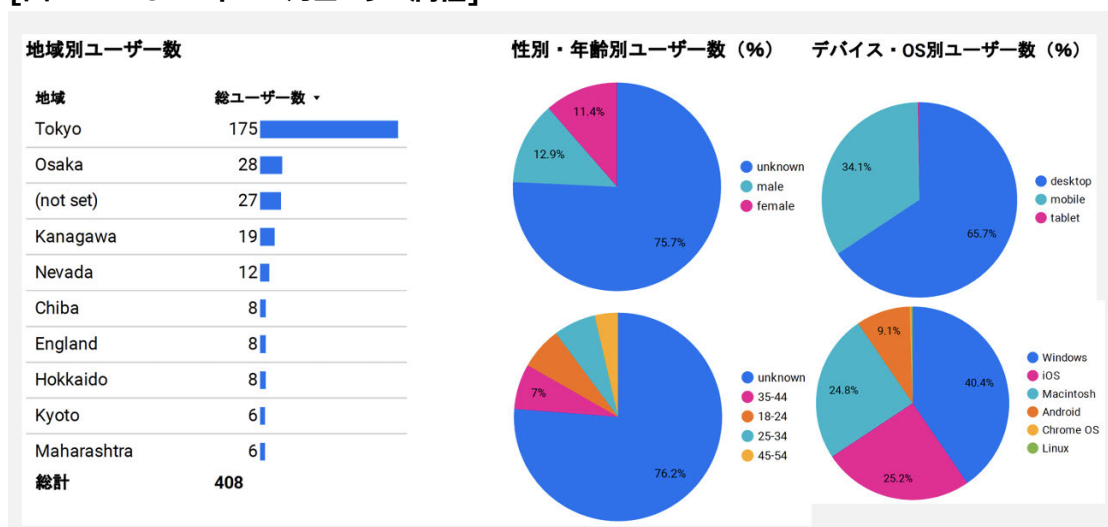
11 月度は、利用ユーザー数 408、視聴回数 950 回で、エンゲージメント率は 46.02%であった。先月からさらに増加したうえ、引き続き総ユーザー数 380 以上、新規ユーザー数 350 以上を維持しており、これで 7 月から 5 ヶ月連続となる。また、データ分析を開始した前年度の同月と比べると、ユーザー数・セッション数の増加率は 40%を超えており、この 1 年でかなりのアクセス改善が見られた。(図 23、図 39 参照)

11 月度は東京国際映画祭で行ったカンファレンス情報のプレス発信や、映画祭の情報ページにサイトアドレスを記載する等の広報活動を積極的に行ない、加えて海外展開ページの更新を行なうなど、更なるユーザーアプローチ強化により、後半にかけてアクセス数が一層伸びた。(図 26、図 39 参照)

[図 23 : 2022 年 11 月ユーザー数推移]



[図 24 : 2022 年 11 月ユーザー属性]

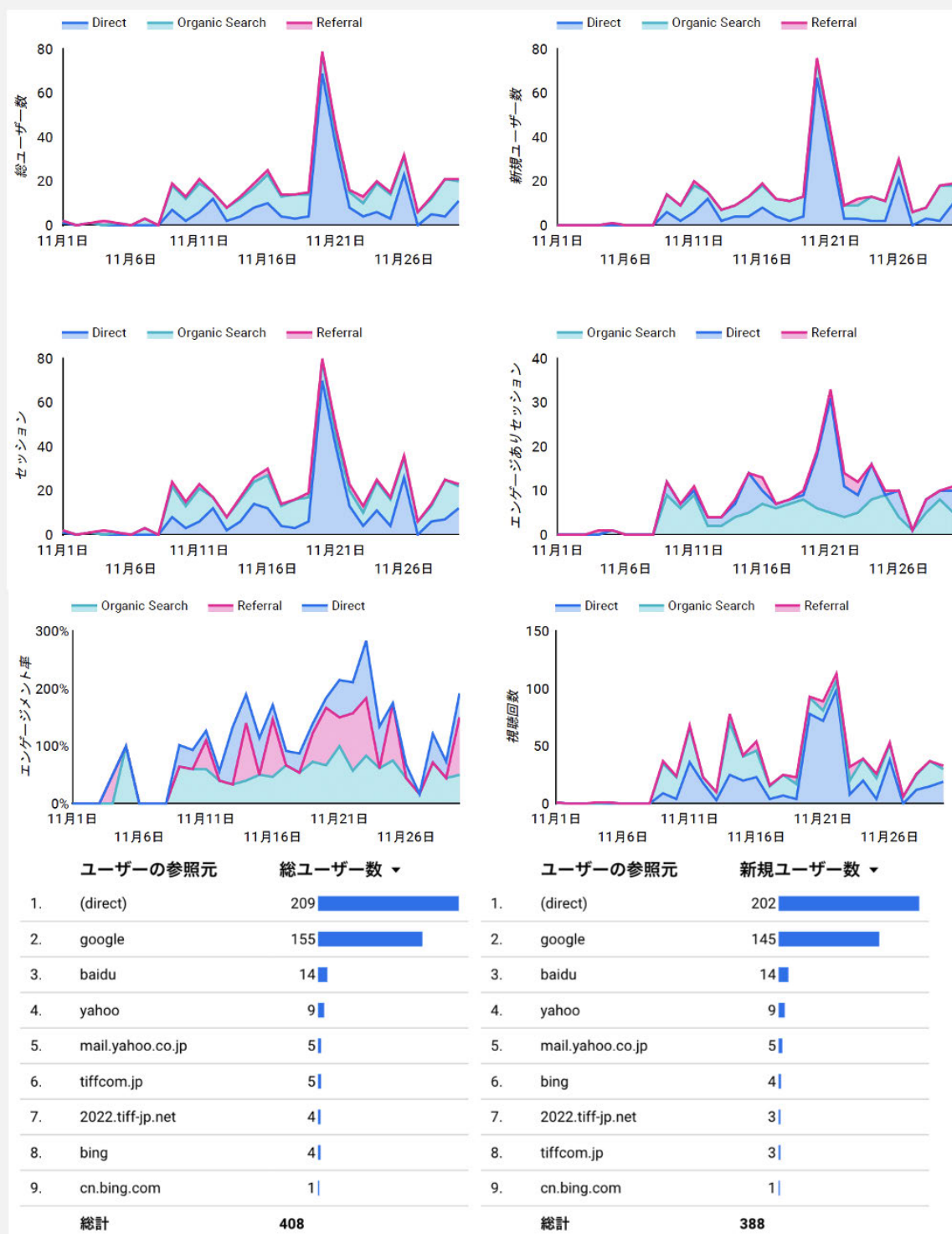


11 月度の閲覧ページは、日中映画共同製作協定の手続きページへのアクセスが大幅に増加し、ページ階層別の視聴回数は 14.9%を占めており、新規ユーザーについては 2→108 とかなりの増加率となっている。（図 21、図 25 参照）

[図 25 : 2022 年 11 月ページ視聴回数]



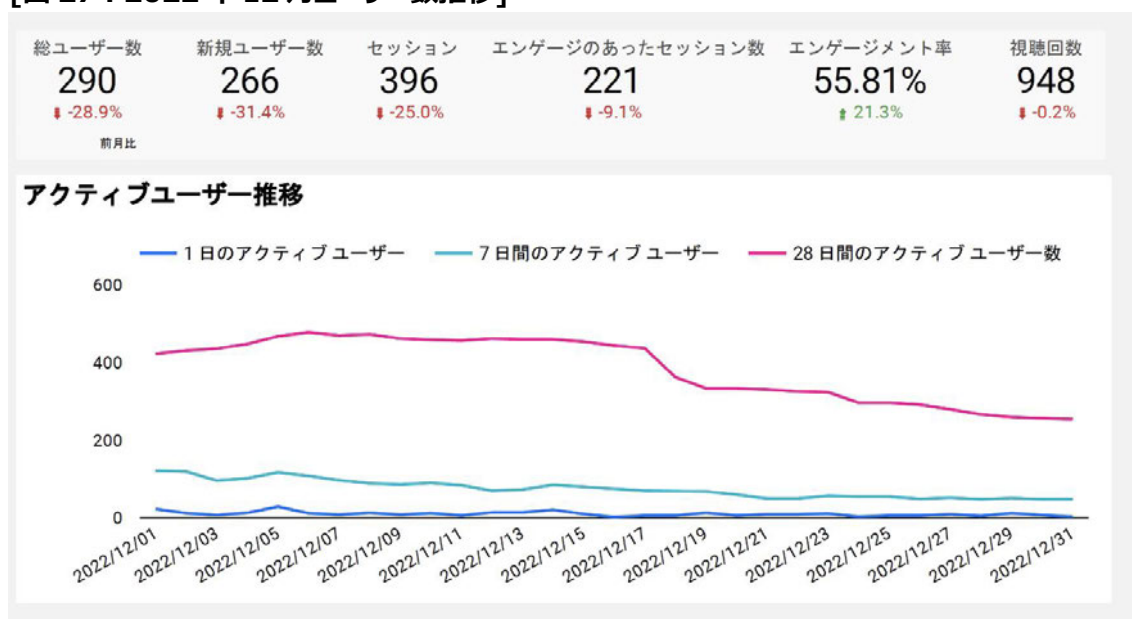
[図 26 : 2022 年 11 月流入元]



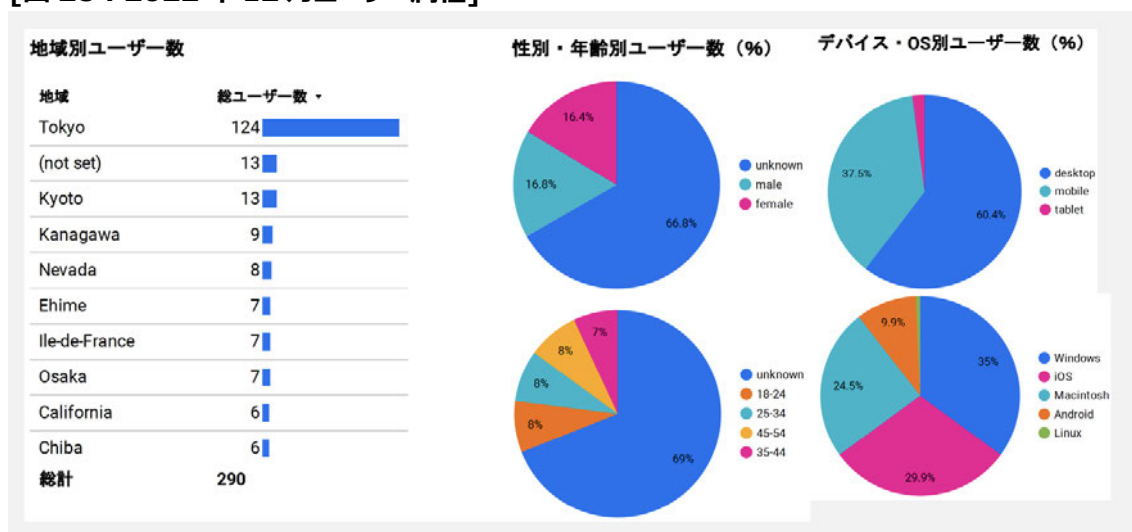
(7) 2022 年 12 月

12 月度は、利用ユーザー数 290、視聴回数 948 回で、約半数の 55.81%のエンゲージメント率を獲得している。(図 27 参照) 全体的に減少傾向ではあるものの、前年度比では総ユーザー数、新規ユーザー数、エンゲージありセッション数 50%以上の増加率となっており、TIFFCOM 会期終了後も安定したアクセスを得ているといえる。(図 39 参照) また、地域別ユーザーにおいては、フランス、アメリカ合衆国等のグローバルアクセスが上位 10 地域のうち 10%を占めており、継続して国内外に情報発信ができている。(図 28 参照)

[図 27 : 2022 年 12 月ユーザー数推移]



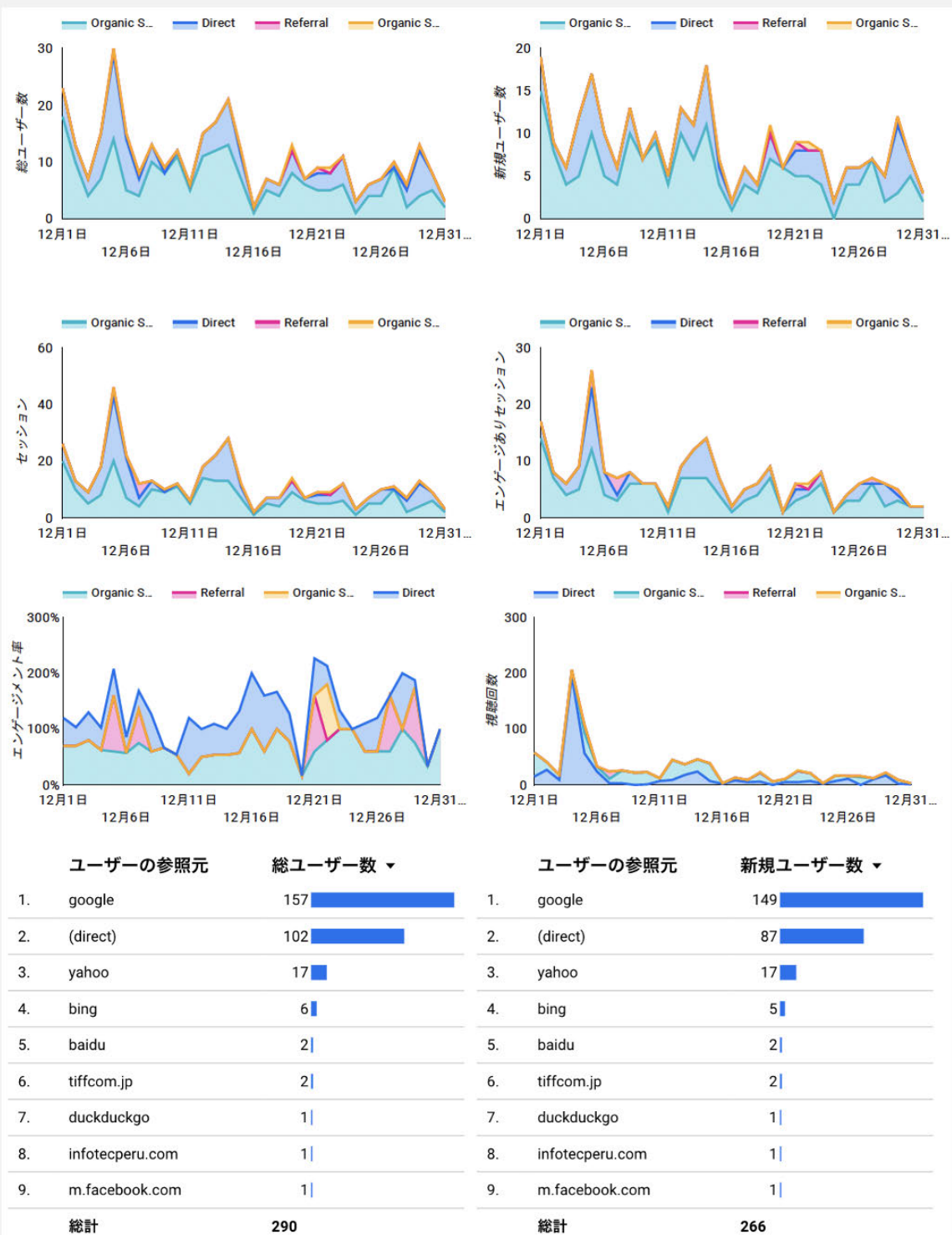
[図 28 : 2022 年 12 月ユーザー属性]



[図 29 : 2022 年 12 月ページ視聴回数]



[図 30 : 2022 年 12 月流入元]

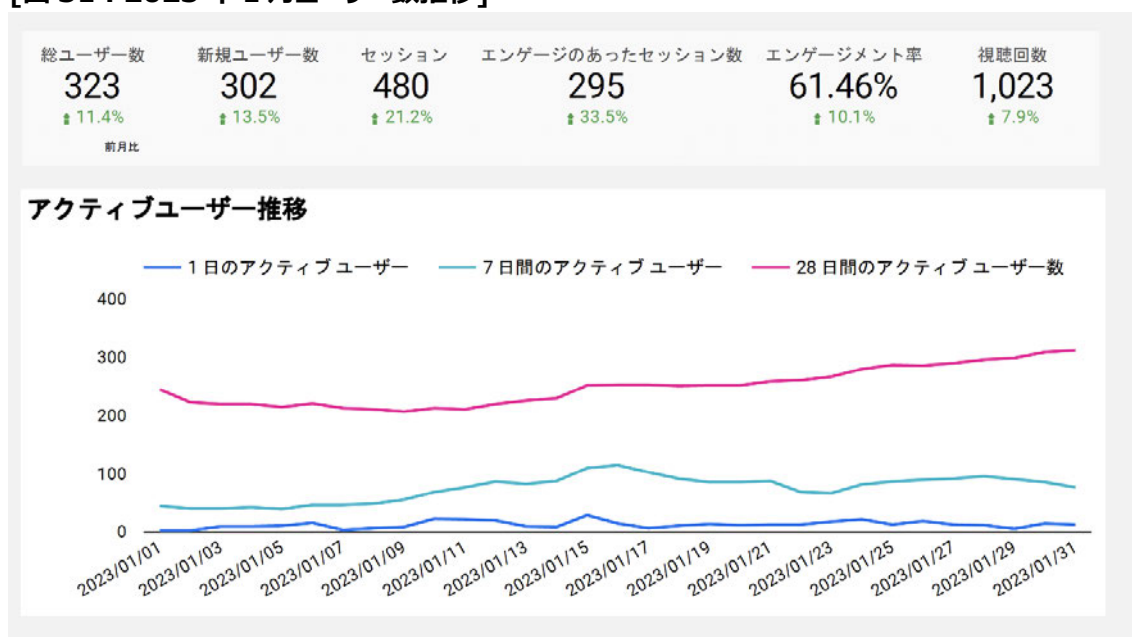


(8) 2023 年 1 月

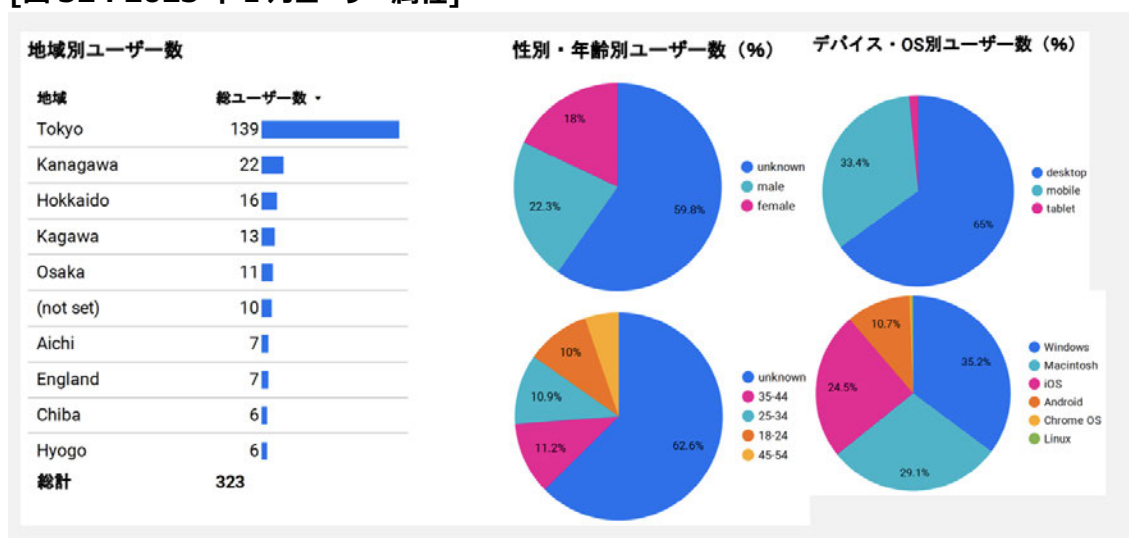
1 月度は、利用ユーザー数 323、視聴回数 1,023 回で、エンゲージメント率においては過去最高値の 61.46%を獲得した。当月は「国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス 2022」のコラムとニュース投稿に加え、スクロールの多かったトップページをリニューアルすることでユーザービリティの向上を図り、全項目が前月比増となった。(図 31 参照)

特に前年度比においては、各ユーザー数で 75%以上、視聴回数で 82%、エンゲージありセッションにおいては 98%の増加率となり、大幅な改善が見られている。(図 39 参照)

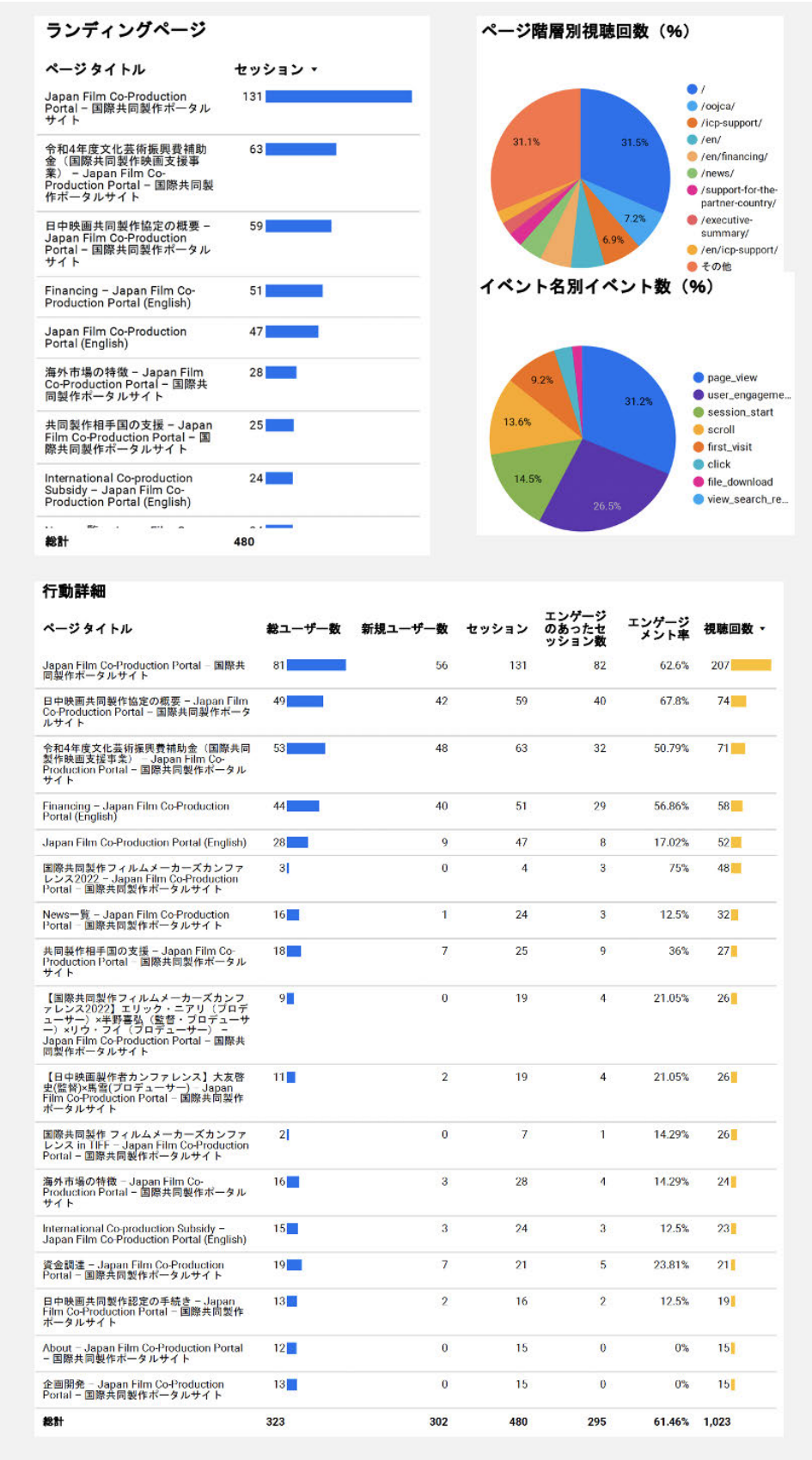
[図 31 : 2023 年 1 月ユーザー数推移]



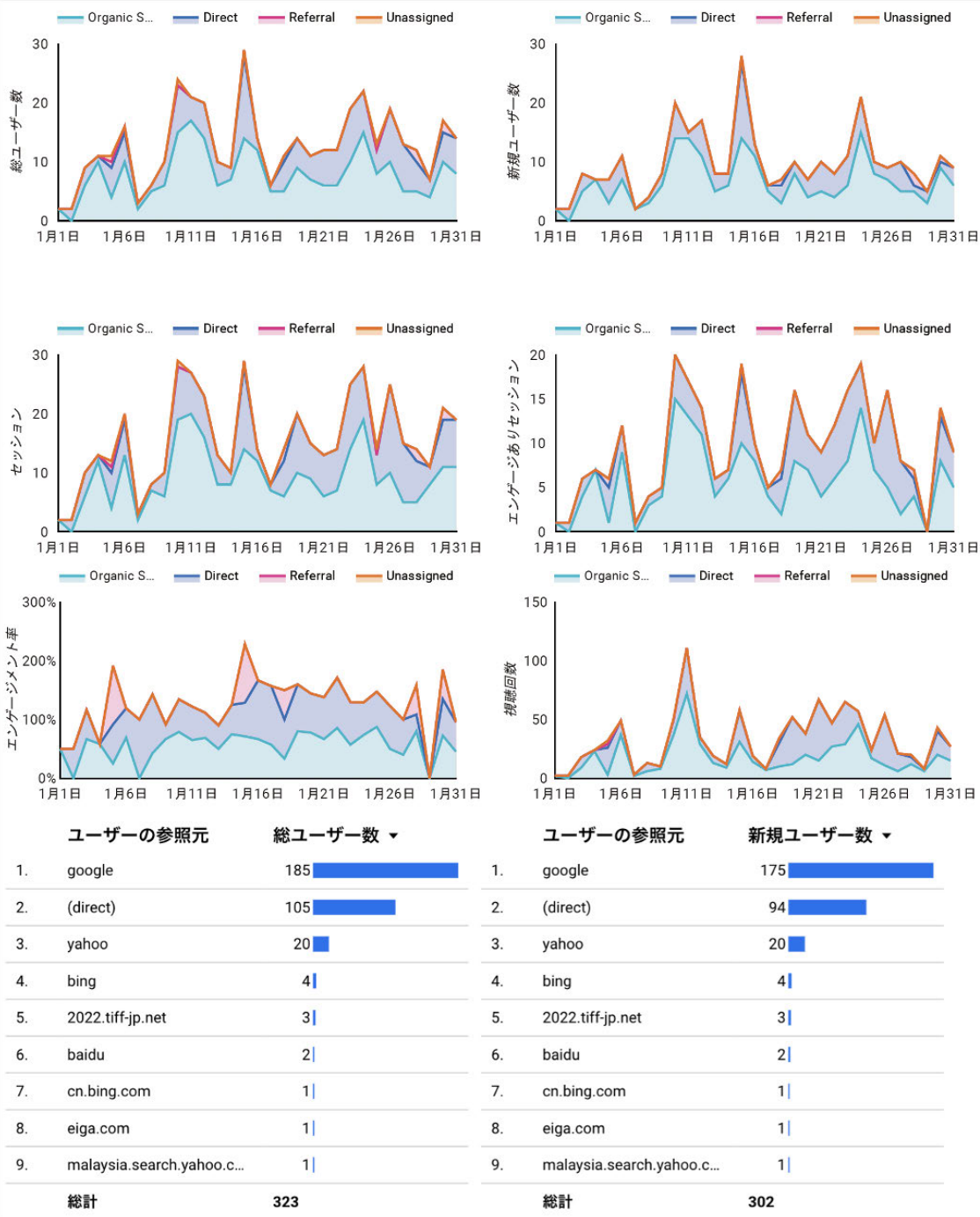
[図 32 : 2023 年 1 月ユーザー属性]



[図 33 : 2023 年 1 月ページ視聴回数]



[図 34 : 2023 年 1 月流入元]

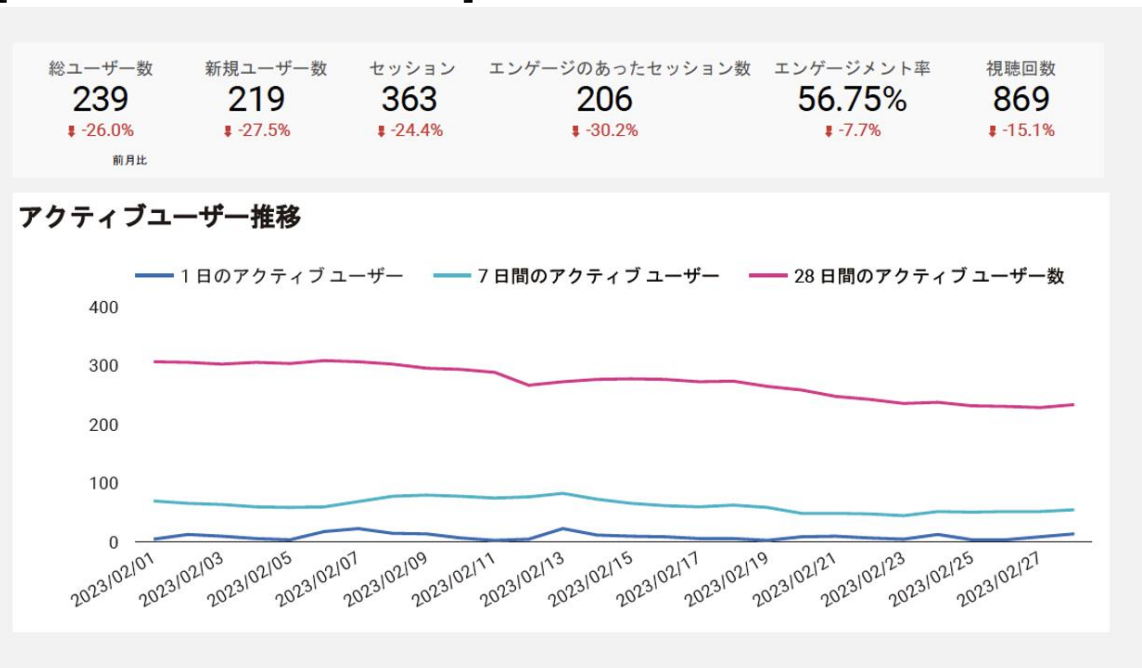


(9) 2023 年 2 月

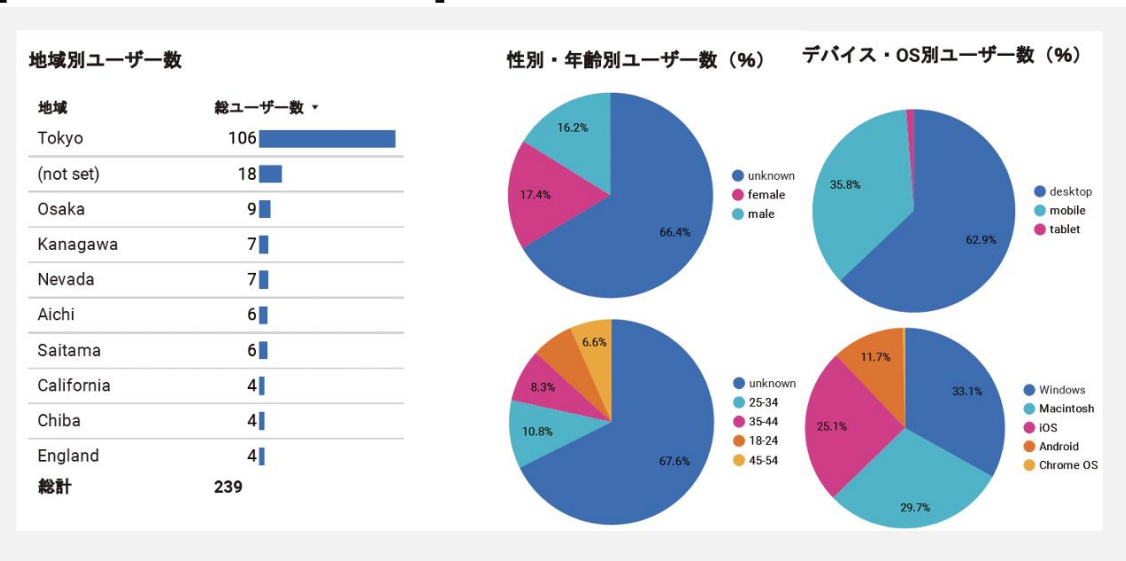
2 月度は、利用ユーザー数 239、視聴回数 869 回で、約半数の 56.75%のエンゲージメント率を獲得している。(図 35 参照)

2 月度は英語ページにも「国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス 2022」のコラムおよびニュース投稿、また香港映画発展局に関するニュース投稿、さらにはベルリン国際映画祭併設マーケットにおける当サイトの告知チラシの配布など、複数のアプローチを行なったことで、中旬以降にかけてユーザー数に動きがあった。(図 38 参照)

[図 35 : 2023 年 2 月ユーザー数推移]



[図 36 : 2023 年 2 月ユーザー属性]

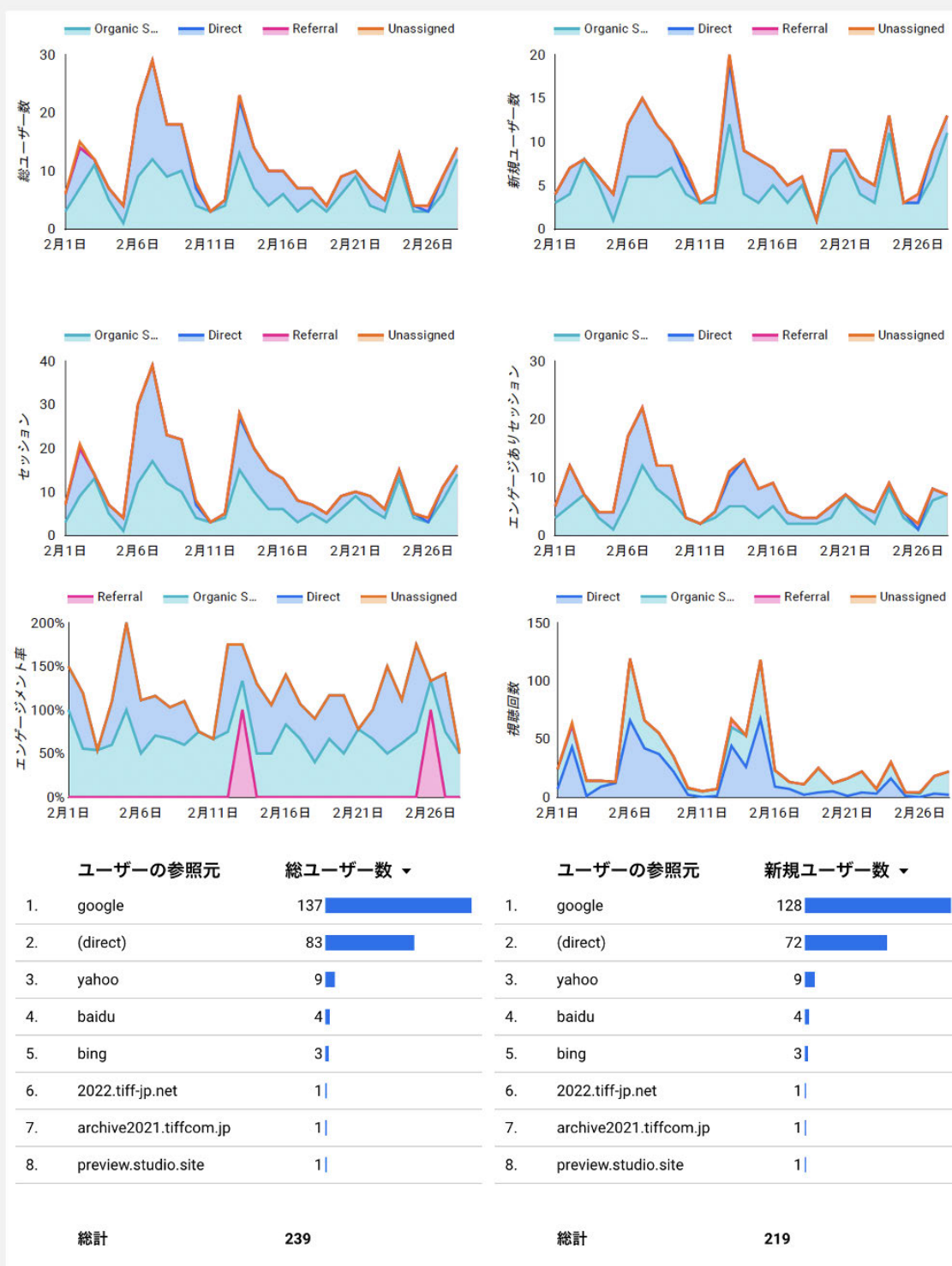


閲覧ページについては、資金調達と令和4年度文化芸術振興費補助金の英語ページへのアクセスが増加している。中でも資金調達ページについては、日本語より英語ページの方がアクセス数の多い結果となっており、これは1月度に引き続き2ヶ月連続である。このことから、継続して海外ユーザーに情報収集目的で当サイトがよく利用されていることがわかる（図33、37参照）

[図 37 : 2023 年 2 月ページ視聴回数]



[図 38 : 2023 年 2 月流入元]



(10) アクセス推移の前年度比

サイトへのアクセスを開設当初の前年度と比較すると、月平均値で、総ユーザー数、新規ユーザー数、セッション数、エンゲージメント率、視聴回数ともにすべて前年度を上回っており、サイトの活用が促進されてきたことがわかる。

[図 39 : 月平均値比較]

2021年度						
	総ユーザー数	新規ユーザー数	セッション	エンゲージありセッション数	エンゲージメント率	視聴回数
2021/11	275	267	361	244	67.59	900
2021/12	191	175	309	143	46.28	720
2022/1	184	169	295	149	50.51	562
2022/2	224	198	332	167	50.30	967
月平均	219	202	324	176	53.67	787

2022年度						
	総ユーザー数	新規ユーザー数	セッション	エンゲージありセッション数	エンゲージメント率	視聴回数
2022/2-3	195	164	339	174	51.33	1134
2022/4	208	182	347	191	55.04	827
2022/5	253	237	350	169	48.29	563
2022/6	273	248	384	209	54.43	682
2022/7	414	391	539	295	54.73	932
2022/8	380	358	521	300	57.58	867
2022/9	384	356	541	318	58.78	1132
2022/10	396	366	553	296	53.53	925
2022/11	408	388	528	243	46.02	950
2022/12	290	266	396	221	55.81	948
2023/1	323	302	480	295	61.46	1023
2023/2	239	219	363	206	56.75	869
月平均	314	290	445	243	54.48	904
前年度比	↑ 44%	↑ 43%	↑ 37%	↑ 38%	↑ 2%	↑ 15%

総括

2022 年度は、コラムや資金調達の支援事例ページの新設、継続したニュース投稿、トップページのリニューアルなどを行ない、積極的にユーザーへのアプローチ強化を図った。また、昨年度に引き続き、イベントや説明会等による広報活動などにより、海外からのアクセスも継続して獲得でき、国内外問わず情報発信ができていたことが確認できた。

2021 年度と月平均を比較すると、総ユーザー数・新規ユーザー数・セッション・エンゲージありセッション数・エンゲージメント率・視聴回数の全項目において前年度を上回る結果となり、全体的にアクセスの改善を達成できた。(図 39 参照)

特に 1 月のトップページリニューアルによってユーザービリティが向上したことから、1 月度は過去最高のエンゲージメント率 61.46%を獲得できたうえ、全項目が前月比増となり、加えて同月前年度比では各ユーザー数で 75%以上、視聴回数で 82%、エンゲージありセッションで 98%の増加率となり、サイトリニューアルによる大幅なアクセス改善効果があったといえる。

さらに、毎月の地域別ユーザーTOP10 において、東京の他によく見られる地域が複数あることから、国内・海外において一定のリピーターを獲得できていると推測できる。

2023 年度以降の当サイトの更なる有効活用のためには、2022 年度のような広報活動や SEO 対策はもちろんのこと、コンバージョンを高めるためのページ対策を強化する必要があると考える。具体的には、改めてサイト目標の明確化を図り、適切なコンバージョン設定と Google Analytics を活用した情報分析を行なうことで、的確なページ改善を実施し、PDCA を回す必要があると考える。引き続きサイト改善に努めながら、グローバルな情報サイトとして完成度を高めていく計画を立てていきたい。

2.1.4 国際共同製作ポータルサイト広報

■他団体サイトでの掲載

サイトのリンクを掲載いただいている他の関連団体は以下のとおり。

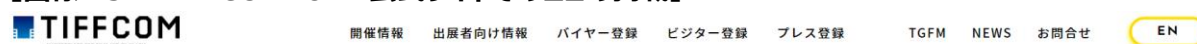
(a)第 35 回 東京国際映画祭（2022）

〔画像 14：東京国際映画祭公式サイトでのロゴの掲載〕



(b)TIFFCOM

〔画像 15：TIFFCOM2022 公式サイトでのロゴの掲載〕



Supporters / Partner Events



(c)ユニジャパン

〔画像 16：ユニジャパン公式サイトでのロゴの掲載〕



(d)動画協会

〔画像 17：動画協会公式サイトでのロゴの掲載〕



他のウェブサイトへのリンクが掲載されることは当ポータルサイトへのアクセス数を伸ばし、オーガニック検索（検索連動型広告などの広告表示を除いた、いわゆる通常の検索結果のこと）を増やす要因ともなるため、今年度以降も積極的に他関連団体への掲載を呼びかけていきたい。

■ベルリン ヨーロピアン・フィルム・マーケット（EFM）期間中の告知

ベルリン ヨーロピアン・フィルム・マーケット(通称 EFM)は、世界三大国際映画祭であるベルリン国際映画祭に併設されるマーケットである。2 年間のオンライン開催からようやく対面形式となり、多くの製作者が参加した当マーケットにおいての告知を目的に、ハガキサイズのチラシを 1,000 部作成し、文化庁が設けた「ジャパン・ブース」に委託し、ジャパン・フィルム・コミッションや国内の映画祭などのチラシと同様に配布してもらった。

EFM 概要：2023 年 2 月 14 日～22 日

来場数：132 カ国から 11,500 名

出展数：78 カ国から 612 社

[画像 18：チラシ と EFM での写真]



ジャパン・ブース受付デスクに告知チラシを設置

2.2 国際共同製作者カンファレンス

2.2.1 国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス開催概要、映画祭との連携

本事業の国際共同製作映画製作者カンファレンスは、昨年度実施の日中製作者カンファレンスに続き、日本・中国を含む国際的な映画製作者の交流を促すことを目的として実施された。今年度は第35回東京国際映画祭と連携し、国際交流基金と映画祭で設けた「交流ラウンジ」にて行われたカンファレンスでは、画祭公式出品作品の日本・中国・米国の監督・プロデューサーの間で活発な議論が交わされた。

- ・タイトル：TIFF スペシャルトークセッション国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス
International Coproduction Film Makers Conference in TIFF
- ・主催：経済産業省
- ・運営：ユニジャパン
- ・開催日時：2022年10月26日(水) 14:30～15:30
- ・開催場所：有楽町 micro FOOD & IDEA MARKET
(東京都千代田区有楽町 1-10-1 有楽町ビル 1F)

東京国際映画祭ウェブサイトや、国内外プレスへの案内を行い、カンファレンスの録画は映画祭 YouTube チャンネルに掲載し、実施後も広く視聴できるものとした。

<https://2022.tiff-jp.net/ja/lineup/film/3515SSP04>

・登壇者プロフィール：



エリック・ニアリ Eric NYARI (U.S.A)

第35回東京国際映画祭 コンペティション部門『山女』プロデューサー
米シネリック社代表取締役、シネリック・クリエイティブ社長。

劇映画、ドキュメンタリー、4K 修復プロジェクトを多数企画・プロデュース。イランの巨匠・アミール・ナデリ監督、西島秀俊主演の話題作『CUT』(2012)。イタリア時代劇『Monte(山)』(2016)がヴェネチア国際映画祭で“監督・ばんざい！ 賞”を受賞。ヴェネチア国際映画祭でプレミア上映され

たドキュメンタリー映画『Ryuichi Sakamoto: CODA』(2017)は報知映画賞、文化庁映画賞を受賞。2020年にはNHKと国際共同製作した高校野球ドキュメンタリー『甲子園：フィールド・オブ・ドリームス』が米スポーツ局 ESPN で放送され、日本で劇場公開。福永壮志監督の『AINU MOSIR』がトライベッカ映画祭のインターナショナル・ナラティブ・コンペティション部門にて“審査員特別賞”を受賞。

JP: <https://2022.tiff-jp.net/ja/lineup/film/3501CMP11>

EN: <https://2022.tiff-jp.net/en/lineup/film/3501CMP11>

<https://cineric.jp/about/>



半野喜弘 HANNO Yoshihiro (Japan)

第 35 回東京国際映画祭

Nippon Cinema Now 部門『彼方の閃光』監督・プロデューサー
作曲家/映画監督/脚本家。

台湾の巨匠ホウ・シャオシャン監督作品『フラワーズ・オブ・シャンハイ』
(1998)で海外メディアから「新たな映画音楽作家の発見」と評価をうけて
以降、ジャ・ジャンクー、ユー・リクワイ等、現代アジアを代表する監督達と共

同作業を重ね、カンヌ国際映画祭、ヴェネチア国際映画祭などで高い評価を得ている。アジア・フィル
ム・アワード作曲賞、台湾金馬奨音楽賞等にノミネート。最新作はフランスの名匠クリストフ・オル監督
『Le lycée』(ジュリエット・ピノシュ、ヴァンサン・ラコスト)。

映画監督としても『雨にゆれる女』(2016)でデビューし、東京国際映画祭アジアの未来部門に招待。
監督第二作の台日合作『パラダイス・ネクスト』(主演:妻夫木聡・豊川悦司 音楽:坂本龍一)は
2019年に台日で公開され、台湾金馬奨 2019 の美術賞にもノミネートされた。

JP: <https://2022.tiff-jp.net/ja/lineup/film/3505NCN03>

EN: <https://2022.tiff-jp.net/en/lineup/film/3505NCN03>
<http://www.yoshihirohanno.com/>



リウ・フイ LIU Hui (China)

第 35 回東京国際映画祭 アジアの未来部門『へその緒』プロデューサー

プロデューサー、坏兔子影业 (Bad Rabbit Pictures Ltd.) の創業者。

代表作に『飛蛾撲火』『失踪、発見』『私を雲まで連れて行って』『はじめての別
れ』『風平浪静』などがある。『飛蛾撲火』は 2018 年ベルリン国際映画祭「テ
ディベアアワード」のドキュメンタリー部門、2018 年サンフランシスコ Frameline
国際映画祭メインコンペティションドキュメンタリー部門、第 39 回ダーバン国際
映画祭ドキュメンタリー賞にノミネートされる。『失踪、発見』は第 22 回上海国
際映画祭金爵奨メインコンペティション部門、第 32 回中国電影金鶏奨監督賞にノミネートされる。日本
では中国映画祭「電影 2019」のオープニング作品として上映される。『はじめての別れ』では第 69 回ベ
ルリン国際映画祭ジェネレーション部門の最優秀作品賞、第 31 回東京国際映画祭アジアの未来部門
最優秀作品賞を受賞する。『風平浪静』は第 23 回上海国際映画祭上海国際映画祭金爵奨メインコ
ンペティション部門作品賞にノミネートされる。

『はじめての別れ』では第 69 回ベ
ルリン国際映画祭ジェネレーション部門の最優秀作品賞、第 31 回東京国際映画祭アジアの未来部門
最優秀作品賞を受賞する。『風平浪静』は第 23 回上海国際映画祭上海国際映画祭金爵奨メインコ
ンペティション部門作品賞にノミネートされる。

JP: <https://2022.tiff-jp.net/ja/lineup/film/3502ASF04>

EN: <https://2022.tiff-jp.net/en/lineup/film/3502ASF04>

市山尚三 *モデレーター

東京国際映画祭 プログラミング・ディレクター

サミュエル周、樋口裕子 *通訳

2.2.2 国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス議事録

中国インディペンデントの良作が生まれている背景

市山：第 35 回東京国際映画祭で上映された皆さんの作品についてお話しください。

リウ：映画の製作は、脚本の完成から撮影を経て皆さんに見て頂くまでに多くのプロセスがあり非常に長い時間がかかります。さまざまな困難をのりこえて夢を実現させるという大きな責務を背負っているのがプロデューサーという仕事だと思っています。

『へその緒』は、まず脚本を中国国内のいろいろな映画祭にもっていきました。「FIRST 映画祭」（中国の若手映画人の作品を中心に上映される映画祭）、「北京国際映画祭」、「金鶏奨映画祭」（中国最大の映画賞表彰式と同時開催の主に中国、香港、マカオ、台湾の作品を中心とした映画祭）に参加し北京では 1 位となり、金鶏奨でも認められ、いずれも賞金が出ました。中国の（自ら資金調達を行う）インディペンデントの製作者と共同製作を行う際は、中国の映画祭の脚本コンペティションに参加して資金を得るというのがひとつの方法だと思います。次に資金集めが大きな仕事です。中国映画集団が参加してくれば大きな展開が見込まれますが独立映画に特化して支援する会社もあります。また、上海の文化基金等、さまざまな資金を募れる環境があります。

私が過去に製作した作品を評価して資金提供してくれるような環境もありますので、（登壇者の）お 2 人も中国で映画を撮りたいと思ったならば私に声をかけていただければ一緒にできると期待しています。

『へその緒』はロケ地である内モンゴルで撮影し自然環境も厳しいところでしたが、自治区政府はじめ様々なところから撮影許可等の援助を得ることが非常に重要でした。プロデューサーが引き受けなければならない重要な仕事です。最近は独立系の作品を撮ることに対して地方政府からもこうした理解が進んできていると感じています。自然環境の変化にあわせ臨機応変にスタッフを組成するのも大変でした。

この作品はチャオ・スーシュエ監督が初めて監督する作品でしたので、周りのスタッフが重要でした。幸いにもベテランの優秀な方々を集めることができたことは非常に大きかったです。

今はこれからどう配給、宣伝していくかということで頭がいっぱいです。プロデューサーの役割は作品をどういい形で展開していけるかということに尽きるので、自分たちの理想を求め情熱を持って常にチャレンジしていきたいと思っています。

市山：中国からインディペンデントの良作が生まれている背景がよくわかりました。いくつかの映画会社や財団などが若手を支援している環境があるということですね。

台湾の映画製作の環境は協力的

市山：続いて半野監督にお話をいただきます。半野監督はホウ・シャオシェン監督『フラワーズ・オブ・シャンハイ』の音楽をきっかけに、ジャ・ジャンクー監督をはじめ多くの作品で国際的な仕事をされてきて、監督もされています。妻夫木聡さん主演の『パラダイス・ネクスト』という大胆でおもしろい作品を日本・台湾で

共同製作されました。こういった経緯だったのでしょうか？

半野：日本で映画会社発ではない挑戦的な企画を実現するのは難易度が高く、まず日本で資金集めをしようとしたが脚本で厳しい反応だったので台湾へ持って行ったところ、台湾を舞台にして日本台湾双方で知名度のある俳優が主演、ということに興味をもってもらえ、資金の7割が台湾で集まりました。それらはほぼ企業からで、助成金としては日本の文化庁の国際共同製作助成金、台湾の機材の会社が参画してくれ高価な撮影機材を提供いただいたのも大きかったです。

市山：撮影や、制作現場の環境はどうでしたか？

半野：脚本の内容について台湾側のプロデューサーからの提案で議論したこともありましたが、台湾での撮影はロケに非常に協力的で、日本よりも人と人の繋がりで物事をすすめることができる環境だと感じました。

カメラマン以外のスタッフは台湾で集めました。以前フランスで撮影したこともあります、国による環境としての働き方の問題というより、どんな国でも優秀な人、優秀ではない人、情熱のある人、ない人がいるということなのだと思います。

アメリカとの共同製作の可能性 出資の組み合わせ方

半野：今回の『彼方の閃光』は俳優もすべて日本人ですが、日米合作作品です。長崎の原爆、米軍基地の問題等を扱っていますが、メッセージとしては戦争という不幸なことがあると日本にとってアメリカは敵となり、同様にアメリカにとっては日本が敵になる、では敵とはなんなのかという問いなのですが、日米双方の視点があるのがフェアだと考え合作にしたいと考えました。

シカゴ国際映画祭に行った際に知り合った方々が資金協力で動いてくれて、アメリカから資金を得ました。映画祭というのは新しい出会いをつかむ場だと思います。日本人は（映画祭に）積極的に参加しない傾向がありますが世界標準から見ると業界関係者に対して「こういう作品を作りたい」という話ができる場であるわけで、映画祭を利用しない手はないでしょう。

市山：最後にニアリさんの話を伺います。プロダクションスタジオを経営しながらアミール・ナデリ監督、西島秀俊さん主演の『CUT』を手がけられ、以来多くの作品をプロデュースされています。これも国際共同製作でしたか？

ニアリ：今回の作品は日本とアメリカのハイブリットで資金を集めました。アメリカ側は日系アメリカ人の『CUT』はプロデュース 2 作目でしたが、映画祭でナデリ監督に出会い、人生が変わりました。配給会社から製作費を得ることは難しかったので日本映画に興味がある外国人を中心に 40 人ほどから個人資金の提供を受けました。

ヨーロッパは政府の助成金、日本は製作委員会という資金調達のシステムがあるがアメリカにはどちらもな

い。ただし古くから富裕層が芸術をサポートする文化があり、比較的簡単に映画は撮れます。日本のインディより環境がいい。

市山：日本からすると羨ましいですね。日本は製作委員会を組成することが多いわけですがいろいろな意見が上がり作品がいつの間にか変わっているとか、作品の尺も一定の制限がでてきますが、個人投資家であればそうならなくて済む。

半野：私の作品も同じく個人投資家 2 名が半分を出してくれました。

市山：『山女』はどのように資金調達しましたか。

ニアリ：ハイブリットです。日本では小さい製作委員会を組成し、文化庁の助成金、NHK の出資を得ました。アメリカではこれまで短編中心に行ってきた映画投資家から初めての長編作品にということで出資を得ました、投資リスクと引き換えに経験というベネフィットも得られるようにという考え方ですね。

監督の企画が NHK のテーマに合うものだったので先に TV 版を撮影できたことで映画版は自由につくることができました。

市山：いろいろな出資があって 1 億を超える予算がつくれたのですね。

国際共同製作は人と人とのつながりから 国際映画祭の重要性

リウ：お 2 人の話を聞いてたいへん勉強になりました。国際共同製作の難しさを感じます。『へその緒』の監督の次回作については、フランスで撮る予定ですので参考になります。フランスの共同プロデューサーはこれから見つける予定です。

市山：半野さんはフランスに住んでおられましたね。それで半野さんに音楽をお願いした作品は CNC（注 1）の助成金を得るのに基準のポイントをクリアできました。

半野：確かに 20 年間フランスに居住登録をして活動していましたので、CNC の助成金を得るためのポイントにカウントされる権利がありましたね。CNC は助成金額が大きい分、作品のレベルも高く競争率も高いのでしっかり基準をクリアしていなくてはならないわけです。

市山：フランス人でありながら台湾を拠点に編集を行っている方にも参画してもらいました。

リウ：私の作品でもお願いしたことがありますし、次の作品でも依頼しようと考えています。

半野：このように人と人とのつながりから作品が生まれ参加してきたというのが殆どです。映画というのはプロ

ジェクトとしては大きい、実は人と人が繋がるというパーソナルなことが非常に大事で、映画祭という出会いの場に、これから（映画を）作りたい人は参加してほしいと思っています。

ニアリ：映画は長期間にわたる仕事なので、好きな人とでなければ難しい。私もこれまで映画祭で出会ってこの人と仕事したいということが多いので、本来の交流ができるように早く戻ってほしいです。

市山：私とご一緒いただく次回作についてもお話しください。

ニアリ：東京フィルメックス映画祭での企画募集に応募して感じたことですが、日本映画と他のアジア映画の製作費の差が大きく、アートよりの作品でも他国では1億円程度あるが、日本ではそれすら難しく残念です。しかしこの作品は製作委員会も組成し、文化庁の助成金が得られ、台湾からも個人投資家のほか TAICCA（注2）、台北市からの助成が得られている。アート作品ではありますが、希望のあるストーリーで哲学的にも面白いモノクロの時代劇なので、これまでにない規模で攻めた作品が実現できそうです。

<質疑応答>

日本では撮影現場の労働時間の問題があると言われていますが皆さんの作品はどうでしたか？

リウ：中国と他国では違うところがあるとは思いますが、少ない資金の中で限られた日数で撮影を終えるために労働時間が延びることはどうしてもあります。とくに天気や自然光を捉えるのは時間との戦いになります。芸術を追求するのも映画人の愛すべきところですが、一方でプロデューサーとして気をつけなければならない点です。

半野：撮影現場において何が心地よく何が辛いのかは個人によって違い、どこで線引きをするかが難しいところです。1つだけ確かなことは、脚本がよく演者が素晴らしく、プロデューサーや監督がすべての俳優スタッフに愛情をもって接していれば辛いレベルは限りなく下がるということです。決してスタッフやエキストラが映画の道具になるのではなく一緒につくっている個人だという認識を僕たちが持つことが大事なんじゃないでしょうか。

ニアリ：アメリカの現場と比べ、日本の現場は長時間労働などギリギリまでやっています。国際共同製作はいつもと違うパターンに変えるいい機会になると思います。半野さんの話のように低予算の場合皆が愛情をもって参加しいろいろな制限があるなかでベストな結果を出したいと思っているので難しいところですが、プロデューサーがバランスをとるのだと思います。

（注1）CNC フランス国立映画映像センター（Le Centre national du cinéma et de l'image animée）フランスの国産映画およびオーディオビジュアルの包括的な支援を行う公的機関

（注2）TAICCA 台湾クリエイティブ・コンテンツ・エージェンシー（Taiwan Creative Content Agency）台湾の映画を含む文化コンテンツの産業化、国際化を促進する公的機関

[画像 19 : カンファレンスの様子]

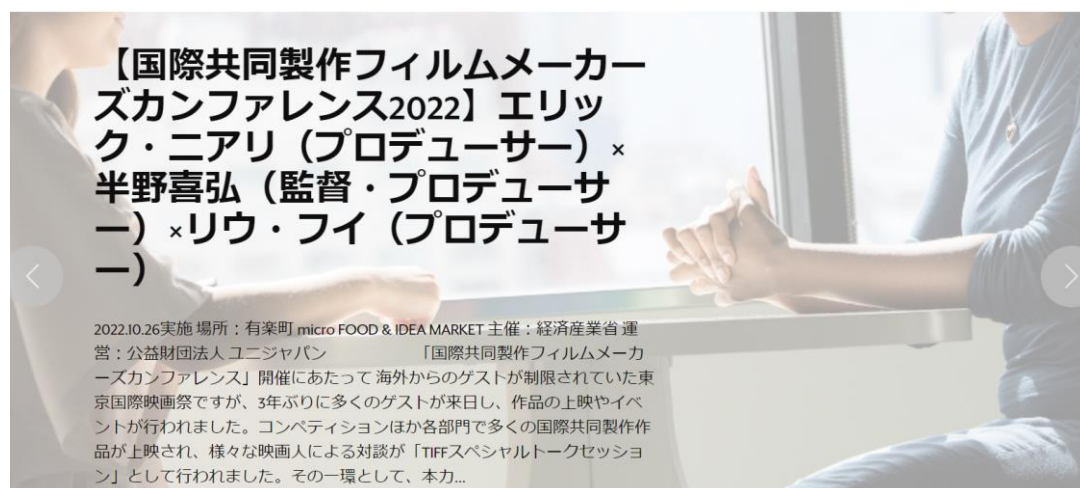


2.2.3 国際共同製作ポータルサイトへの掲載

カンファレンスは日本語・中国語の二か国語で実施したが、その内容を英語でも書き起こして国際共同製作ポータルサイトの「コラム」ページに日・英で掲載し、英語話者の製作者へも共有できるようにした。

〔画像 20 : コラム掲載〕

Column



[画像 21 : コラム掲載イメージ]

国際共同製作は人と人のつながりから 国際映画祭の重要性

- リウ お2人の話を聞いてたいへん勉強になりました。国際共同製作の難しさを感じます。『へその緒』の監督の次回作については、フランスで撮る予定ですので参考になります。フランスの共同プロデューサーはこれから見つける予定です。
- 市山 半野さんはフランスに住んでおられましたね。それで半野さんに音楽をお願いした作品はCNC（注1）の助成金を得るのに基準のポイントをクリアできました。
- 半野 確かに20年間フランスに居住登録をして活動していましたので、CNCの助成金を得るためのポイントにカウントされる権利がありましたね。CNCは助成金額が大きい分、作品のレベルも高く競争率も高いのでしっかり基準をクリアしていなくてはならないわけです。
- 市山 フランス人でありながら台湾を拠点に編集を行っている方にも参画してもらいました。
- リウ 私の作品でもお願いしたことがありますし、次の作品でも依頼しようと考えています。
- 半野 このように人と人のつながりから作品が生まれ参加してきたというのが殆どです。映画というのはプロジェクトとしては大きいですが、実は人と人が繋がるというパーソナルなことが非常に大事で、映画祭という出会いの場に、これから（映画を）作りたい人は参加してほしいと思っています。
- ニアリ 映画は長期間にわたる仕事なので、好きな人とでなければ難しい。私もこれまで映画祭で出会ってこの人と仕事したいということが多いので、本来の交流ができるように早く戻ってほしいです。
- 市山 私とご一緒いただく次回作についてもお話しください。
- ニアリ 東京フィルメックス映画祭での企画募集に応募して感じたことですが、日本映画と他のアジア映画の製作費の差が大きく、アートよりの作品でも他国では億円程度あるが、日本ではそれすら難しく残念です。しかしこの作品は製作委員会も組成し、文化庁の助成金が得られ、台湾からも個人投資家のほかTAICCA（注2）、台北市からの助成が得られている。アート作品ではありますが、希望のあるストーリーで哲学的にも面白いモノクロの時代劇なので、これまでにない規模で攻めた作品が実現できそうです。



■ 英語版

International Co-production Filmmakers Conference 2022

26th, Oct. 2022

At micro FOOD & IDEA MARKET, Yurakucho, Tokyo

Hosted by Ministry of Economy, Trade and Industry

Organized by Unijapan

On the Occasion of the “International Co-production Filmmakers Conference”

Although TIFF used to limit the number of guests from abroad, for the first time in three years, many guests came to Japan to attend film screenings and events. Many international co-productions were screened in the competition and other sections, and various filmmakers held conversations at the “TIFF Special Talk Sessions”. As part of this program, producers and directors with international co-production experience from China, the U.S., Taiwan, and other countries took to the stage to discuss how they overcame hurdles such as differences in funding methods and production processes to realize international co-productions, the current state of co-production in their countries, and future plans.

This column is an English translated transcript of the conference.

Speakers

Eric NYARI

Producer, “Mountain Woman”, Competition, Tokyo International Film Festival 2022

HANNO Yoshihiro

Director/Producer, “Lightning Over the Beyond”, Nippon Cinema Now section, Tokyo International Film Festival 2022

LIU Hui

Producer, “The Cord of Life”, Asian Future section, Tokyo International Film Festival 2022

Moderator

ICHIYAMA Shozo

Programming Director, Tokyo International Film Festival 2022

Interpreter

Samuel CHOW, HIGUCHI Yuko

Profile

◇Eric NYARI (U.S.A)

President of Cineric Creative, and Cineric, Inc.

He has planned and produced many dramatic films, documentaries, and 4K restoration projects. The much-talked-about “Cut” (2012), directed by Iranian master filmmaker Amir NADERI and starring NISHIJIMA Hidetoshi. His Italian period drama “Mountain” (2016) won the “Director of the Year” Award at the Venice International Film Festival. In 2020, he co-produced an international high school baseball documentary with NHK, “Koshien: Japan’s Field of Dreams,” which aired on the U.S. sports broadcaster ESPN and was released theatrically in Japan. “Ainu Moshiri” directed by FUKUNAGA Takeshi won the “Special Jury Prize” in the International Narrative Competition section at the Tribeca Film Festival.

◇HANNO Yoshihiro (Japan)

Composer/Director/Screenwriter

Since “Flowers of Shanghai” (1998), directed by Taiwanese master HOU Hsiao-Hsien, was acclaimed by the international media as the “discovery of a new film music composer,” he has worked with many leading contemporary Asian directors, including JIA Zhangke and YU Lik-wai, and has received high praise at the Cannes International Film Festival and Venice

International Film Festival. He has been nominated for the Asian Film Award for Best Composition and the Taiwan Golden Horse Awards for Best Music. His latest film is “Winter Boy” (Juliette BINOCHE, Vincent LACOSTE), directed by master French director Christophe HONORÉ.

He also made his debut as a film director with “The Woman in the Rain” (2016), which was invited to the Future of Asia section at the Tokyo International Film Festival. His second film as a director, the Taiwan-Japan co-production “Paradise Next” (starring TSUMABUKI Satoshi and TOYOKAWA Etsushi, with music by SAKAMOTO Ryuichi), was released in Taiwan and Japan in 2019 and was also nominated for Best Art Direction at the Taiwan Golden Horse Awards 2019.

◇LIU Hui (China)

Producer and founder of Bad Rabbit Pictures Ltd.

His representative works include “The Silk and the Flame”, “Lost, Found”, “Send Me to the Clouds”, “A First Farewell”, and “Back to the Wharf”. “The Silk and the Flame”, was nominated in the Documentary category of the 2018 Berlin International Film Festival’s Teddy Awards, in the Main Competition Documentary category of the 2018 San Francisco Frameline International Film Festival, and for Best Documentary at the 39th Durban International Film Festival. “Lost, Found”, was nominated in the Main Competition section of the 22nd Shanghai International Film Festival’s Golden Globe Awards and for Best Director at the 32nd China Film Golden Rooster Awards. In Japan, it was screened as the opening film of the Chinese Film Festival 2019. “A First Farewell”, won the Best Film Award in the Generation section at the 69th Berlin International Film Festival and the Best Film Award in the Future of Asia section at the 31st Tokyo International Film Festival. “Back to the Wharf” was nominated for Best Film in the Main Competition at the 23rd Shanghai International Film Festival.

Background to Good Chinese Independent Films Being Produced

Ichiyama: Please tell us about your films screened at the Tokyo International Film Festival 2022.

Liu: The production of a film takes a very long time, as there are many processes involved from the completion of the script, to the shooting of the film and the viewing of the film. I believe that the job of a producer is to overcome various difficulties and bear the great responsibility of making dreams come true.

For “The Cord of Life,” we first submitted the script to various film festivals in China. It won first place at the Beijing International Film Festival and the Golden Rooster Film Festival (a film festival held in conjunction with China’s largest film awards ceremony that focuses mainly on films from China, Hong Kong, Macau, and Taiwan). The film was also recognized at the Golden Rooster Awards. Both festivals offered cash prizes. I think one way to get funding for co-productions with Chinese (self-financed) independent filmmakers is to participate in screenplay competitions at Chinese film festivals. The next major task is to raise funds. There are companies that specialize in supporting independent films, although a major investment can be expected if the China Film Group participates. There are also various fundraising environments, such as the Shanghai Cultural Foundation.

There is also an environment in which my past films are evaluated and funded, so if either of you (speakers) would like to make a film in China, please contact me and we can do it together.

The film “The Cord of Life” was shot on location in Inner Mongolia, where the natural environment is very harsh, and it was very important to obtain filming permission and other assistance from various sources, including the autonomous region government. It is an important job that producers must undertake. Recently, I feel that the local government is becoming more understanding of the importance of independent filming. It was also difficult to organize the staff flexibly in response to changes in the natural environment.

Since this was the first film directed by QIAO Sixue, the staff around her was very important.

Fortunately, we were able to gather a group of experienced and talented people.

Now my mind is occupied with how to distribute and promote the film from now on. The role of a producer is to determine how to develop a film in a good way, so we will always challenge ourselves with passion in pursuit of our own ideals.

Ichiyama: I now understand the background behind the production of good independent films from China. I understand that there is an environment in which several film companies and foundations are supporting young filmmakers.

Taiwan's Filmmaking Environment is Cooperative

Ichiyama: Next, we would like to talk to Director Hanno. Director Hanno started his career as a music composer for Hou Hsiao-Hsien's "Flowers of Shanghai," and has worked internationally on many directors' films, including those by Jia Zhangke. You co-produced a bold and interesting film in Japan and Taiwan called "Paradise Next" starring Tsumabuki Satoshi. How did that come about?

Hanno: It is very difficult to realize a challenging project that does not originate from a film company in Japan, so we first tried to raise funds in Japan, but the response to the script was very harsh, so we took the film to Taiwan. The funds came mostly from companies, but we also received a grant from the Japanese Agency for Cultural Affairs for international co-productions, and a Taiwanese equipment company participated and provided us with expensive filming equipment.

Ichiyama: How was the shooting and production environment?

Hanno: We had some discussions about the script based on suggestions from the Taiwanese producers. Taiwan was very supportive of location shooting, and I felt that it was an environment where things could be done through more human connections than in Japan.

We gathered all the staff in Taiwan except for the cameraman. I have shot in France before, but I think it is not so much a question of working style as an environment depending on the country, but rather the fact that in any country there are excellent people and not so excellent people, people with passion and people without passion.

Co-production possibilities with the U.S. / How to combine investments

Hanno: "Lightning Over the Beyond" is a Japan-U.S. co-production, although the actors are all Japanese. The film deals with issues such as the atomic bombing of Nagasaki and the U.S. military base. The message is that the unfortunate events of war make the U.S. an enemy of Japan, and likewise, Japan an enemy of the U.S. So the question is, what is an enemy? I thought it would be fair to have both the U.S. and Japanese viewpoints, so I decided to make it a joint film.

I think film festivals are a place to meet new people. Japanese people tend not to actively participate in film festivals, but from a global perspective, film festivals are a place where you can talk to people in the industry and say, "This is the kind of film I want to make," and there is no reason not to take advantage of them.

Ichiyama: Lastly, I would like to talk to Mr. Nyari. While running a production studio, you produced "Cut" directed by Amir Naderi and starring Nishijima Hidetoshi, and since then you have produced many films. Was this also an international co-production?

Nyari: "Cut" was the second film I produced, but I met director Naderi at a film festival and it changed my life. It was difficult to get money for the production from the distributor, so I received private funding from about 40 people, mostly foreigners who were interested in Japanese films. In Europe, there is a system of funding through government subsidies, and in Japan through production committees, but in the U.S. there are no such system. However, there has long been a culture of wealthy people supporting the arts, and it is relatively easy to make films. The environment is better than that for Japanese indies.

Ichiyama: From Japan's perspective, I envy this. In Japan, production committees are often formed, but many opinions are raised and before you know it, the film has changed, and there are certain

restrictions on the length of the film.

Hanno:Two private investors paid for half of my work as well.

Ichiyama:How did you raise funds for “Mountain Woman”?

Nyari:It was a hybrid. In Japan, we formed a small production committee and obtained a grant from the Agency for Cultural Affairs and funding from NHK. In the U.S., we received funding for our first feature-length film from a film investor who had been investing mainly in short films, so the idea was to gain the benefit of experience in exchange for the investment risk.

Since the director’s project fitted in with NHK’s theme, we were able to shoot the TV version first, which gave us the freedom to make the film version.

Ichiyama:So you were able to make a budget of over 100 million yen from various investments.

International Co-Productions Start with People-to-People Connections / The Importance of International Film Festivals

Liu:I learned a lot from your talk. I feel the difficulty of international co-production. The director of “The Cord of Life” is planning to make her next film in France, so this will be helpful. We are planning to find a French co-producer.

Ichiyama:

You lived in France, didn’t you, Mr. Hanno? So the film for which we asked Mr. Hanno to compose the music for cleared the criteria points for receiving a CNC (Note 1) grant.

Hanno:Yes, since I have been registered as a resident of France for 20 years, I was entitled to be counted toward the points needed to receive a CNC grant, but because the CNC grants are large, the quality of the work is high and the competition is high, so I had to meet the criteria.

Ichiyama:We also had a French person who is an editor based in Taiwan participate in this project.

Liu:I have asked him to work on one of my films, and I am thinking of asking him to work on my next film as well.

Hanno:In this way, most of the works that have been created and participated in are through the connections between people. Although a film is a large project, the personal connection between people is very important, and I hope that people who want to make films in the future will participate in film festivals, which are places where people can meet each other.

Nyari:Film is a long-term job, so it is difficult to make a film unless you like it. I have often met people at film festivals and wanted to work with them, so I hope that they will return soon so that we can continue our exchange.

Ichiyama>Please tell us about your next film.

Nyari:As I felt when I submitted my film to the TOKYO FILMeX Film Festival, there is a big difference in production costs between Japanese films and other Asian films. However, this film formed a production committee, received a subsidy from the Agency for Cultural Affairs, and received funding from TAICCA (Note 2) and the City of Taipei, as well as private investors from Taiwan. Although it is an art piece, it is a monochrome historical drama with a hopeful story and an interesting philosophical point of view, so it seems that it will be possible to realize a work that attacks on an unprecedented scale.

<Q&A>

It is said that there is a problem of working hours on set in Japan.

Liu:I think there are some differences between China and other countries, but in order to finish filming in a limited number of days with limited funds, the working hours are inevitably longer. Especially when it comes to capturing weather and natural light, it is a race against time. While the pursuit of art is an endearing aspect of being a filmmaker, it is also a point that we must be careful about as producers.

Hanno:It is difficult to draw a line between what is comfortable and what is difficult on the set, because it depends on the individual. I think it is important for us to recognize that the crew and extras are not just tools for the film, but individuals who are making the film together.

Nyari: Compared to the American production site, the Japanese production site is working long hours and working until the very last minute. I think international co-productions provide a good opportunity to change the usual patterns. As Mr. Hanno said, in the case of a low-budget film, everyone wants to participate with passion and produce the best possible result under various restrictions, so it is a difficult task, but I think the producer must strike a balance.

(Note 1) Le Centre national du cinéma et de l'image animée (CNC) is a public organization that provides comprehensive support for French domestic films and audiovisuals.

(Note 2) TAICCA Taiwan Creative Content Agency. A public organization that promotes the industrialization and internationalization of Taiwanese cultural content, including films.

2.3 事務局問合せ内容報告

本年度、国内外から事務局に寄せられた国際共同製作に関する問い合わせは以下のとおり。

表 C：事務局問い合わせ内容一覧

対応日	問合せ内容	国外	対応（回答）
2022/ 6	スペインでの上映の権利元問合せ	○	JapaneseFilmDatabase の紹介
2022/ 7	ドミニカとの映画祭を主とした関係構築およびロケ誘致	○	映画祭プログラムおよび TIFFCOM 出展の紹介
2022/9	フランスとの共同製作パートナーを紹介してほしい	○	実績のある会社で企画が明確だったため配給会社をいくつか紹介
2022/11	国際共同製作の支援の応募方法について知りたい		文化庁の国際共同製作、芸文振の支援制度の紹介
2022/11	カナダとの共同製作をする場合の支援について知りたい	○	・共同声明に基づきカナダ側の支援への申請が可能であること、同時に日本側の自動的な支援はないことの説明 ・日本の製作パートナーが応募できる文化庁の支援を紹介
2022/12	日本での撮影を前提に制作会社および配給パートナーを探したい	○	JFC と主な配給会社について説明、TIFFCOM を紹介
2023/2	国際共同製作の支援について知りたい	○	日本の申請者を前提とする文化庁助成金の紹介
2023/ 2	日本のプロデューサーを紹介してほしい	○	TIFFCOM、TGFM、Japan Creator Bank の紹介

おわりに

我が国はいち早く映画産業が発達し、長年国内市場のみで成立してきたことから、政府の介入や他国からの外貨獲得なしに産業が成長してきた。それに付随して近年は国内映画の比重も高く、結果として海外と連携するような経験が乏しいままの状況が続いている。国際化が急速に進むなか、今後少子化により国内の需要が大きく飛躍することが見込めない我が国にとって、海外展開の推進は積極的に取り組むべき課題である。

特に昨今は配信プラットフォームの台頭から、国際的なコンテンツ需要が急速に高まっており、「国際共同製作」は、海外展開を行うために最も有効な手段のひとつである。文化や経験、ノウハウの異なる製作者たちが集まって作り上げる国際共同製作では、企画や資金調達、制作、市場展開に至るまで、その多くの段階で自国とは異なる考えや商習慣が交差し、多くの困難に直面することとなる。これらの課題に政府の継続的な支援が行われることで製作者が国際共同製作に取り組みやすくなり、日本映画の海外展開が促進されることが期待される。

国際共同製作の促進に資する施策・制度等は国内外で多数存在し、また、それらは目的も様々だ。本事業の「国際共同製作ポータルサイト」を軸に、支援を受けようとする映画製作者にとって煩雑な、施策・制度の照会や関係機関等への照会・繋ぎなどを行う窓口機能を担い、国内外からの国際共同製作に関する問い合わせにも対応できる体制を整えることで、引き続き日本のコンテンツ産業の海外展開に寄与することができた。今後も継続して映画製作者にとって有効な情報発信を行う必要がある。

「国際共同製作フィルムメーカーズカンファレンス」では、コロナ禍を経て直接の交流が叶い、日本・中国・米国の映画製作者が活発に意見を交換する場を提供することができた。特に中国からの渡航制限は想定以上に厳しく、来日が叶ったゲストは 2 名のみであった。中国を交えた国際的な視座を共有する場が提供し得たこと、製作者間の交流がもてたことの意義は非常に大きかったといえる。引き続き共同製作相手国としての中国市場の変化や映画産業の最新動向をとらえ、製作者間の相互交流機会を創出していくことが重要である。また当然ながら中国にとどまらず国際共同製作が盛んな欧州や、実写だけでなくアニメーション領域においても共同製作の機運を高めていくための取り組みが求められる。